

理趣釈対照理趣経意識

空海遍照金剛の弟子は毎日に理趣経を誦する。

この理趣経は理趣釈で理解する。今回は空海様の著作を座右に置きつつ大学で小林先生に習った梵文解釈の助けも得て和訳は荷が重く意識に努めた。

理趣釈の門外貸出を断った史実のように理趣経は師資相伝であるから無闇に表すことは躊躇するが所々に散乱する時代に一石を投じた。此処に現時点での悩み相談等わずかな纒な発は心こ利り他た行ぎやうと浅学の成れの果てを書き上げる。

もとより真実諦ではなく生滅言辞である。拙僧が京都大学の卒論の目標としたのが理趣経であった。当時は仏教の慈悲の所在が不明でスラム街でのセツルメント活動などで利他行の在り処を探っていた。その一方で私はお釈迦さまや空海さまの動機が知りたかった。何を目指されたのか。何がそうさせたのか。

理趣経百字偈には泥中の根が蓮華を咲かせる譬えがある。泥が咲かせるのか、それとも泥がなくても咲くのか。私のセツルメント経験では泥は現に在るのでありそれを意識化しなければ咲かない。ならば釈迦師匠も空海師匠も泥中に居たのだ。泥と自分。最古経の釈迦の「見えな

い矢」の発見は自分自身の泥だ。自分が泥か、それとも泥と自分は分離できるのか。無意識や抑圧を説く心理学では泥が見えない。下部構造を説く哲学では泥が主役だ。適者生存や弱肉強食論では泥が明日をつくる。

問題を大悲に転ずれば、助ける側と助けられる側がある。理趣経の菩薩の境地を比喻する妙適が釈では「金剛薩埵亦是蘇囉多。以無縁大悲。遍縁無盡衆生界。願得安樂利

益。心會無休息自他平等無二故」。特に無休息自他平等無二とあるのは、まさに能助と所助の共鳴を指す。しかし能助というが自分が泥中に居なかった人間がかって本気で能助できたというのか。自ら溺れたもののみが他者の存在を確認できるのではないのか。

且つ、此れは菩薩の位であって如来ではない。如来を知らない菩薩が果たして泥中と泥外の区別ができるのか。だから菩薩は無休息なのだ。なぜなら泥中に在ることが生きるということであるかもしれないからである。ならば泥を知ることから始めなければならない。

さて、空海さまの言われるように、昔は私達凡夫と同じく迷ったお釈迦さまがその解決をしたのだ。その後塵を拝するのも一つのショートカットではないか。諸行無常であり人生は短い。その上あれだけの戦争の惨禍で「戦争だけはしてはならない。人間が野獣同然だ」と言い切った人々も一人去り二人去りして代が変わると「戦争って本当にあつたの。嘘でしょ」である。温故知新という。歴史を繙くのは厄介な作業。梵文や漢文理解も要るし、なによりその時代の人になりきらなければならない。時代も勉強せねばならない。他人を知るためには種々多様な経験を積みねばならない。まるで理趣経の一切智智の習得だ。二千年も前の経典など読解しなくてもウィキペディアを愚愚ればいい。そこに乗せれば古典を読まなくてもショートカットできるようにしてあげようと思つた意識。しかしショートカットはない。

理趣經和訳（意識）

大樂金剛不空眞實三麼耶經（実働して眞実を見せ金剛智慧の大樂を生む釈迦が証した道を説く経）

如是我聞。一時。薄伽梵。

成就殊勝一切如來金剛加持三麼

耶智。

一切如來者。…五佛是也。

其五佛者。即盡虛空遍法界

無盡無餘佛。聚成此五身也。

耶智^やを完成した。金剛が加持するとは、先ず^ま金剛とは密

教特有の智慧だ。バジュラ^ばといふ次の意味を持つ。

まず清浄力^{じやうじやうりき}あらゆるものを打ち砕く武器である故に自分や他人の三毒などの煩惱を砕く^{くだ}。

①不動^{ふどう}⇓ダイヤモンドのように固く自他平等で平安な涅槃の心境が不動^{ふどう}である。（自他平等⇓自分と他人が同じ土俵上^{どばうじやう}にあり且つ共感共鳴している）

②如如^{にょにょ}⇓あらゆる局面で眞実を見る智慧を持つ。智慧とは空海大師に依れば「決断簡拙の義」であり、あらゆる

う。ここでは眞実の智慧と衆生が持つ個別の智慧の行き来を言う。有情の各々にその苦悩や煩惱があり、如來の各々に解決としての仏果とその知恵がある。それを一切智慧という。その一切智慧の各々を自由に行き来することも有る。有情と如來はグラデーションで地続きに広がる。その橋渡しが菩薩。

（四）さまざまな眞実や涅槃の境地をそれぞれに体得しているそれらの如來の全ての金剛のような智慧が作用反作用を繰り返して加持するサマヤの道。

（五）vajra。インドラはバジュラでアヒ（蛇⇓先住民の命である川）を殺害して土地を得る。そのバジュラが今や先住民の部族宗教である密教を帯してバジュラとして蘇る。バジュラは一般に五鈷であり先が五つに割れて五智慧五如來を表す。煩惱を砕き五智慧を得るといふ意味。

（六）三段「調伏難調釋迦牟尼 dusta-vinaya（罪惡を導く）…設置三界一切有情。不墮惡趣。爲調伏故」。金剛という言葉からして敵を想定して敵を砕く意味合いが強く感じる。保護される時代から生き残りを懸けてなりふり構わない時代へ行くのか。

（七）百字偈「如蓮體本染不爲垢所染」。涅槃の状態が不動。

このように私はお釈迦様（大日如來）から聞いた。

ある時、世尊（釈迦）は一切如來の金剛が加持する三麼

（二）空海師の理趣經開題に、不空とは無間の意味で自分が獲得する大樂と他人を導いて生じる大喜が途切れることなく無間に生じること。眞実とは妙適を持つこと。三麼耶 sama-ya の sama は平等。ya は行く。釈迦と同等の場所へ行く。「諸仏如來も昔は因地に在つて本法身に迷うことは我と異なること無し、然るに発大精進勤修正行して已に成正覺。」（秘密三麼耶仏戒儀）

（二）応身、色身と見る。涅槃に四種類中の無住身（二段積）。逝去を「お隠れになった」と表現するがその由來は釈迦入滅後に「見えなくなった」にある。有でも無でもなく（有無中道）、六道のどの世界にも見当たらないが（無住で）常駐であるという考え方が有る。最古の S4-⑮ 経には「一切所平等平安」つまりこの世もあの世も肯定するといふ意味で無住涅槃を説いていた。しかし S4-② 経では「あの世もこの世も求めない」とあり両方否定して般涅槃主義へと変節。S1-4-4 は涅槃した者は何処にも見られないと表記。後述のように法を「存在と把握の一致」としての存在と見るならば、衆生の所有として法は（常に）有る。

（三）adhi-stha。加持とは仏と有情が相互に与え合う作用をい

（一）理趣經を二字下げで表示

（二）訳文は三麼耶で表記。

（三）adhi-stha。加持とは仏と有情が相互に与え合う作用をい

（一）理趣經を二字下げで表示

（二）訳文は三麼耶で表記。

（三）adhi-stha。加持とは仏と有情が相互に与え合う作用をい

（一）理趣經を二字下げで表示

(一) 方途を見つづ正しい道を選ぶ行動力である。

次に加持とは真言宗は三心平等を説き、仏心⇓我心⇓衆生心である故に仏心と衆生心(我心)がお互いを共感し協力し働きかけ合い助け合うことを加持と言う。如来と凡夫の心が行き交い共鳴するのである。師匠と弟子、熟達者と未熟者、人格者と横着者がお互いに切磋琢磨して向上するのに等しい。切磋琢磨とは互いに相手を理解し長所短所を飲み込み関心し感じ働き掛け合うこと。故に加持感応「キヤツチボールしてお互いを感じ合い感化し合う」という。その三摩耶智を完成するとは、サマヤ⇓「涅槃へと行くことが釈迦によって実証されている直道」を決断簡択する(決心して選択する)能力智慧を得たのである。

★大日如来はすでに釈迦から(多種多様な釈迦から)一切如来の灌頂を受けて宝冠を得て三界の主と成っている。なぜ一切如来であるかというのと、如来は独りではなく有情の数だけ在り、苦悩の数だけ在り、また有情の時々刻々移り変わる心の数だけ存在していて、それらの有情の苦悩と、その解決の道筋と、涅槃への通路を光明で照らす智慧(覚りであり涅槃)を得て

(一) 簡括は一切智(智慧の陳列)が必須。決断は一切智(一切智を選ぶ智)。

(二) 空海曰く「不離衆生界有発身、不離法身有衆生界、諸仏如来昔在因地迷本法身與我無異、然発大精進勤修正行已成正覚。」(秘密三摩耶仏戒儀)この意味を籠めたのが三摩耶。前頁注(一)

(三) 釈迦と大日の位置関係は難解。法身説法⇓五大皆有響。大日が大日に灌頂か。

(四) 「十住心論」に、「病源巨多なれば方薬非一なり、己宅遠近なれば道乗干差なり」。患者の数だけ病気の数だけ治療方法が在りその数だけの名医が居るように如来は有情の数だけまた各々の有情の苦悩の数だけ居る。だから一切如来とは巨大な如来ではなく多種多様無数の覚りの一つ一つを言う。

(五) いるから一切如来(全てのいちいちを成し遂げた者)という。

一切如来の灌頂を受けるとは、あらゆる如来の智慧を獲得することであり、一切智慧(個々の煩惱や困難に即したいちいちの治療方法とその涅槃)を自由に行き来して操ることが出来るから三界の主だ。太陽の如くいちいちの命を照らして育てるから大日(大特別な)である。

(五) 非常に重要な点である。一神教は専制的だが、大日経の思想は総体は意味をなさず細部や個々の集まったものが真の存在。国家、国民が在るのではなく在るのは一人一人であり瞬間である。八百万の神しろう利那滅思想の淵源か。大日経に「云何菩提 謂如実智自心。…菩提乃至彼法 少分無有可得。何以故 虚空是菩提…菩提無相故 諸法無相 謂虚空相。」「自心尋求菩提及一切智。何以故 本性清淨故 心不在内不在外 及両中間 心不可得。」「心相続之相、諸仏大秘密。一心諦諦越百六十心生広大功德。」「百六十心とは外道の心(ただ食欲と性欲に浸る異生羝羊心)。愚童持斎心など。そして貪心無貪心 瞋心慈心…阿修羅心 鼠心…という六十心(種々の生存としての横の広がり)と、百六十心(貪瞋痴慢疑が種々展開して無限の時間解脱せず相続する心)を言い、ありとあらゆる生き物が無限の空間と無限の時間(虚空と三劫)に持つ心(煩惱)を言う。その百六十心煩惱に対応する覚りの心が一切智。無数の生き物に対応するのが一切如来。その百六十心を越えるとは、飛び越すのではなく一つ一つを経験して菩提に変えていくこと。故に普賢(samantabhadra)くまなく善を持つ⇓釈迦の善の足跡を全て辿る)という。ある意味で全ての苦悩を経験すること。大日(釈迦)は全ての苦悩を知っているから全ての人を救うことが出来る。というより苦悩の全集合であり菩提の全集合である。三教指帰の群品夥繁、何恠不育(文選)⇓百六十心。

(六) いちいち、一つ一つ確実にやっていくのが普賢菩薩。空が分かるとは一人一人の時時刻々の一つ一つの煩惱に則して解決していくこと。大悟して一気に覚れないのが大日経。我欲を吹き飛ばして(文殊の利剣)一気に悟るのが金剛頂経。

(七) 大きいの意味ではなく特別という意味。大欲大樂大悲⇓仏欲仏樂仏悲。

★已得一切如來灌頂寶冠。爲三界主。

◆已證一切如來一切智智瑜伽自在。能作一切如來一切印平等種種事業。於無盡無餘一切衆生界。一切意願作業。皆悉圓滿。

…能作種種利益。究竟安樂一切有情界悉令圓滿。

◇常恒三世一切時。

…在於異生時。後證聖果時。三業清淨猶如虛空。身語意業不被虛妄分別所生煩惱所染故也。

身語意業金剛。大毘盧遮那如來。

在於欲界他化自在天王宮中。

▶一切如來常所遊處。吉祥稱歎大摩尼殿。種種間錯鈴鐸繪幡微風搖擊。珠鬘瓔珞。半滿月等。而爲莊嚴。

…住般若波羅蜜觀。多作此

天衆王。爲天人說般若波羅蜜。其天界。五欲殊勝超越諸天。是故毘盧遮那佛。爲

◆大日如來は一切如來の一切智(二)に熟達していて完璧に使いこなすことができる(一切智の智慧を持つ

介證一切如來一切智智)ので、そのいちいちの智慧(一切智)を自在に行き来する。彼はそのいちいちの智慧(二)に印(索引、案内板)をつけていてその印をたよりに三密(三)(仏の思いと言葉と体の行為)を思い浮かべ、三密を実行することでさまざまな引導活動(四)をするのだ。すなわち救済相手に対面すると観音菩薩のように相手の立場や環境や性格や生い立ちやを共感して身も心も相手そのものになって、その解決である智慧を選択し変身しては相手と同様の分身を得る(変身、権化、化現)。その様に智慧のいちいち(一つ一つ多々一切)を見ていて(人それぞれの智慧を智慧する)一切智(六)を(六)見(六)て(六)い(六)て(人それぞれの智慧を智慧する)一切智の

(一) 一切智||いちいちの智慧を見るのが一切智智。専門医のいちいちを全部会得。専門医とは臨床であり患者を離れては治療はない(=妙適)。

(二) 灌頂、印、真言は即身成仏の枢要で難解。印は六段。

(三) 仏の身と口と意識の行為は三密。凡夫のは三業。業はのちに苦痛と悔恨を残す。

(四) 引導とは真の幸福としての仏教への道への導き。Vidyāであり戒律と同義。葬儀の引導も同義。

(五) 釈迦が来訪者に即応して的確に治療するのを見て弟子はあまりにも同事である(相手の立場に立つ)のを見て「釈迦は権化している」と信じただろう。

(六) 一切智||いちいちの智慧を見るのが一切智智。専門医のいちいちを全部会得。専門医とは臨床であり患者を離れては治療はない(=妙適)。

智)、法を理解し法を説きつつそれに相応しい事業を展開して、生きとし生けるものに関与して見捨てず与えて満足させるのだ。

◇このようにして過去現在未来の三世(七)へと間断なく活動する心と言葉と行動を完備する如來であり、あらゆる生き物に即応して活動する大日如來が欲望が荒れ狂う欲望世界に降臨し、ありとあらゆる生き物が闊歩する世界のそれらいちいちの生き物に自由に変身(往来)できる宇宙船のような宮殿に参上している。

▶そこでは一切如來が各々自分の得た如來を披瀝(九)して大日は何時でも彼らの智慧を遍歴することができ、その宮殿は、色とりどりの錦の旗やさまざまな鈴や宝玉が風に揺られて調和を愛でている。空には半月や満月が昇ってこれから悟るものも覚ったものもそれぞれ暗示して修行する人々や覚った人々を鼓舞している。

(七) 法||dharma。存在を指すが難解。同時に般若が捉えて地柄から取り出した絵柄を指す。迷妄では見る者と見られるものは分離するが、如來の智慧では識と色は一致して法となる。二辺を離れる見方。特に大悲観では自他不二平等||妙適の境地において如実性智慧として法が発見される。

(八) 大日如來は大と小がある。ここでは大日如來。小大日は個人的な覚りであり、大日はその生き物たちの全てを包含するという経験的世界の感覚であり、実働的側面を持つ。実働的とは実際に種々の有情と作用反作用の共鳴活動を行なうという意味。

(九) 他の如來に変身できるから大日である。

金剛薩埵。説大樂大貪染。^(二)

■ 與八十俱胝菩薩衆俱。

所謂金剛手菩薩摩訶薩。觀自在菩薩摩訶薩。虚空藏菩薩摩訶薩。金剛拳菩薩摩訶薩。文殊師利菩薩摩訶薩。心轉法輪菩薩摩訶薩。虚空庫菩薩摩訶薩。摧一切魔菩薩摩訶薩。與如是等大菩薩衆。恭敬圍繞而爲說法。

・金剛手（三段）表一切如來菩提心。觀自在（四段）大悲。虚空藏（五段）功德福資糧聚。三輪清淨喻若虚空。無盡有爲無漏。成受用變化身資糧也。

金剛拳（六段）三種秘密、得聞如來三業密教修行。獲得世出世殊勝悉地。淨除無始十種不善惡業。證得無障礙究竟智。

文殊師利（七段）般若波羅蜜多慧劍。住三解脱門。纔發心轉法輪（八段）四種輪。

(一) 大貪|| 仏貪大悲。大樂|| 妙適。

■ 三界主である大日の周りには数えきれない菩薩^(二)が出番を待つて踊る。主な菩薩は金剛手、觀自在、虚空藏、金剛拳、文殊、纔發心轉法輪、虚空庫、摧一切魔である。大日はこれらの菩薩に身を移しながら法を説く^(三)。即ち大きな円を描いて大日として遠近に去来し深淺に闊歩する。

その教えは身と語と意の三つの如來の働き^(三)を完備して行いが正しく心構えが正しく判断が正しい^(四)（戒律と禅定と智慧が完備している）。そして三界の悪欲^(四)と習慣^(五)を断滅している。

(一) 菩薩は如來の卵である。例えば阿弥陀如來の卵は觀音菩薩。觀音は衆生の嘆きの声を聞くから音を觀ると書いて觀音。觀音は大悲心によつて良く觀ることによつて阿弥陀となる。

(二) 個々の菩薩も如來も大日の化身だ。その意味は妙適|| 自他不二平等|| 共感共生だ。大日の外に個々の仏菩薩があるのではなく一切智を行き来することで個々となる。だから大日も居ないし個々の仏菩薩も居ない。居るのは衆生だけだ。だから一切空であり多は実在する。

(三) 密教では涅槃を損なう行為を三業^(三)というのに対して、如來の働きは三密という。三は身体と言葉と心（身口意識）。

(四) 「最古層經の無記無分別を解明しブツダの科学的思考と平等の趣意を解く（普通寺教学振興會紀要23号）」三悪欲参照。悪王が渴望する快樂と横取りと政敵の排除。細胞膜で外界と関を設けた内的世界を維持するホメオスタシスの基本的性格は取り込み、吐き出し、保持である。吸う息、吐く息。食事と排出。所有と廃棄。仲間と排他。個体保持と子孫繁榮。細胞膜の内外の不均衡が生命活動であり、時として他を呑み他を圧する。

(五) 西洋哲学では習慣を問題とする。住み慣れた自己を反省

三界とは、

① 欲界↓ 悪欲がその対象と接触して快不快を感受し、その末に魅惑的な物や嫌悪物として形成したカーマを再び外界へと投影して自分の姿を別の形（虚妄、戯論^(六)）で表現した幻想世界^(七)（自分|| 我欲を鏡で映したような世界）と、

② 色界↓ 物と物がぶつかり合うだけの作用反作用するするのは困難。それを mana 自己撞着、自己愛という。同語反復|| トートロジー|| 輪廻を解消するには住居を捨てる↓ 出家。

(六) 煩惱が権化した arī もしない幻影。

(七) 欲界とはカーマに支配された世界。カーマとは愛欲を言ふと共に愛欲が欲した対象を言い、愛欲が作り上げた対象の自分なりの解釈した姿をいう。例えば何日も飢えていて飯を見たときその飯は自分の外に在るのか心中に有るのか。飯が恋人であれば妙適だが。妙適とカーマが正反対の意味であることは後述するとして。飯に飢えているとき、出会う者は全て飯に見えるだろう。そして私は心の中にずっと飯を思い浮かべるといふより飯以外の者は見えない。心は飯に占拠されている。カーマが飯から恋人になると多少事情は異なる。寝ても覚めても恋人が頭から離れない。恋人の理想像はどんどん膨らんで私の恋人像に化ける。これがカーマである。仏教語の想 *samjia* は欲しいものを心に取り込むことであり思い込み。哲学では概念、仏語 *concept*、独語 *Begriff* ↓ しっかり掴む。出会ったもの捕まえること。その捕まえたものは、欲|| カーマ（食欲や性欲など）が自己本位な善悪や好悪によつて味付けをして構成したものである。欲界はカーマたち（カーマが創作した対象、好物や美男美女など）がうようよ居る世界。カーマがカーマをつくりカーマとカーマが対面して化かし合う世界。い。い。い。の煩惱世界。空とはカーマから自由になること。

虚空庫（九段）廣大供養儀。

速滿福德智慧資糧。摧一切

魔（十段）令彼等受化。致

於無上菩提。

如上所釋八大菩薩。攝三種

法。所爲菩提心。大悲。方

便是也。

▶初中後善。文義巧妙。純一圓滿

清淨潔白。

圓滿者。由如上智能斷三界

九地見道修道一切煩惱及習

氣。斷二種障。二種資糧圓

滿也。

清淨者。不捨大悲。於淨穢

土。受用身變化身成佛。經

云潔白者。清淨法界本來不

染。與無量雜染。覆蔽異生

無明住地。其性亦不減。預

聖流證佛地。其性亦不增加。

（一） 福德と智慧。福德は釈迦の前
世物語で捨身施虎など多岐生き物を
何度も何度も現世利益で救う行為の
積分。

（二） 泥中でも大悲の力で涅槃が壊
れないことを清淨という。

色界と、

③無色界↓意識が物質に左右されない自由闊達な無色界
をいう。

その三界を操る煩惱のすべてを学び、学ぶだけではなく
修行してそれらを断じている。即ち悪い欲求が生じるこ

となく、また過去の思い煩いや業の蓄積に汚染されない。
なぜなら彼は過去から積み重ねる悪業を洗い清めるだけ
の人助けをして善行を積み重ね、反省と学びを積み重ね

（二） 釈迦は煩惱という言葉を使わない。煩惱ではなく悪欲求
とそれが生み出す苦悩があるというのが釈迦の教えである。見

えない矢とその結果としての苦悩である。S.115 経に明解に説
かれる。拙著仏教入門1&2に和訳。普通寺教学振興会紀要21
号に論文掲載「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により
釈尊の原体験を特定する」。仏教入門3に詳説。

（二） 悪欲を断じているから、欲界は存在しないともいえる。
取り込む対象としての幻影界は存在しない。慈悲の対象として
の有情界は却って鮮明に存在する。菩薩も身体を持つから色界
の作用反作用は受ける。

（三） 釈迦自身は悪い欲求と良い欲求を分けていた。衆生救済
の欲求は善であり要請されるものである。俱舍宗も欲に善悪無
記ありとする。ところがウパニシャッドを中途半端に学んだ浅
学のもの善の欲求も悪の欲求も一切の欲求を離れたところに
ブラフマンへの帰一が在ると思つたので、あらゆる欲求を否定
する。否定して無願によって一度ブラフマンになった後に衆生
救済するのである。その結果として例えば現代僧侶が修行だけ
して衆生救済をしないという態度となった。現代僧侶の社会問
題に無関心なのも問題だが利権者と不勉強による教理の変質に
依つて齎された災禍は計り知れない。迅速にその呪縛から自灯
明の精神によって釈迦の現実的救済へと戻るべき。それが大乘。

（三） 釈迦自身は悪い欲求と良い欲求を分けていた。衆生救済
の欲求は善であり要請されるものである。俱舍宗も欲に善悪無
記ありとする。ところがウパニシャッドを中途半端に学んだ浅
学のもの善の欲求も悪の欲求も一切の欲求を離れたところに
ブラフマンへの帰一が在ると思つたので、あらゆる欲求を否定
する。否定して無願によって一度ブラフマンになった後に衆生
救済するのである。その結果として例えば現代僧侶が修行だけ
して衆生救済をしないという態度となった。現代僧侶の社会問
題に無関心なのも問題だが利権者と不勉強による教理の変質に
依つて齎された災禍は計り知れない。迅速にその呪縛から自灯
明の精神によって釈迦の現実的救済へと戻るべき。それが大乘。

ている（福德と智慧の二資糧を完成している）。

その修行の完成のおかげで衆生救済のために衆生のとこ
ろに降りていき、衆生を理解するために様々な生き物の
苦しみや悪行や愛欲にどっぷりと浸かつて身も心も同じ
くする（共感、受用身）のに、それらの良くない行為（三業）
に参与しても涅槃を損なうことがない。なぜなら修行を
完成して涅槃（金剛と大楽）を得ているし、涅槃を損な
わないままに、この世の苦しみをなくそうと思ひ立つて

（四） 我れ（我は無く般若）が衆生を共感したり、仏を共感し
たり共鳴すること、併せてそれになることができることを平等
という。三段「設住諸欲猶如蓮花。不爲客塵諸垢所染。疾證無
上正等菩提」。四段「作開敷蓮花勢。觀欲不染。說一切群生種種
色心」。百字偈「如蓮體不染不爲垢所染」。

（五） 人々の煩惱に参与して涅槃が損なわれないかという議論
は釈迦死後に直後に起こった。拙著仏教入門3「説法は可能
か」参照。サムユッタ・ニカーヤ④第四古層SNDev1.3-4「心
manoをあらゆる事柄から制御するべきではない。自制された
心は、抑制すべきではない。悪の生じるその時に応じて、
適時心を制御すべきである。1-35 真に力ある者は表現として
語る。マント人のために思い哀れむから説法する。順応と反論
から解脱しているから。5 SN102。不動とは涅槃不動揺の意。

（六） 何故古来の涅槃という造語に対して金剛を充てたか。そ
れは衆生済度の時に泥に染まることで涅槃が後退することに抗
するためである。そもそも自己犠牲が問題ではなく自己確立と
他者の自立は相互作用して切磋琢磨する。ライバルの相互刺激。
泥と涅槃の相互刺激。煩惱即菩提。発心即到。発心とは大悲。

（七） 発心||信心と勝義心と大悲心。常に悪を浄化する向上心
||勝義心と、衆生を幸福にしようとする遊猛心。勝義心||金剛

説一切法清淨句門。

…者。於生死流轉不染故。廣作利樂有情事故。速證無量三摩地解脫智慧故。速集廣大福德資糧故。超越一切魔羅毘那夜迦衆。速疾得世出世間勝願滿足故。說如來大悲。愍念最上乘種性者。脫十七種清淨瑜伽三摩地。是故諸契經。説三界唯心。由心清淨有情清淨。由心雜染有情雜染。又説有情界是菩薩淨妙佛國土。

★所謂妙適清淨句是菩薩位。

☆妙適者。即梵音蘇囉多也。蘇囉多者。如世間那羅那哩娛樂。金剛薩埵亦是蘇囉多。以無緣大悲。遍緣無盡衆生界。願得安樂利益。心會無休息自他平等無二故。名蘇囉多耳。由修金剛薩埵瑜伽三摩地。得妙適清淨句。是故獲得普賢菩薩位。

いる。それはまさにお釈迦様が涅槃を得た上で衆生を救済しようとしたのと同様である。それこそが^(一)大悲であり、この愛欲と苦しみと悪行の垢土に降り立って衆生救済をしようとする菩提心を起こすから幻の様に実在して在る。

さて、あらゆる衆生の苦悩を解消しようとするならば相手を知らねばならない^(四)。自分の閉じた世界に安住していは他人の苦悩を知る手がかりもない。ゆえにあらゆる^(五)衆生の各々の苦悩とその解決としての涅槃を知る行為の

界バザラダバン。大悲心||胎藏界アヴィーラフーンキャン。

(一) 大悲は誇張表現であり内実は人間性であり情が厚いことだ。そもそも釈迦は他人の苦しみを放置できなかったのだ。人情こそが釈迦出家の動機だ。人情↓殺せない↓共受苦↓衆生救済↓見えない矢の発見と抜矢(Sn4-15経)。その総体が大悲だ。

(二) 奪う排除する快樂の三悪欲(三毒)などで苦しめ合う世界。穢土というが四段「世間一切垢清淨故。即一切罪清淨」より垢。

(三) 梵天勸請を思わせるが違ふ。梵天勸請の釈迦は難解な教理(この世の樂が苦であるという享樂否定の受け入れがたさ)が庶民に嫌がられると思つてためらつた。その後、上座部の長老弟子は完全な涅槃と覺りを得るまで説法できないと考えたり、涅槃は完全寂靜、靜止、離脱と考えてこの世の救済を制限するのである。善行(説法)もまた輪廻昇天の原因を作ると考えた。しかしそもそも歴史的人物としての釈迦は覺つて説法したから仏教が残っているのであり、長老偈長老尼偈にはその詳細が記録されている。釈迦は覺りつつ涅槃しつつ常にこの世で救済していた。その瞬間的行為を理趣経はここに再現している。

(四) 百字偈「有頂及惡趣調伏盡諸有如蓮體本染不爲垢所染」菩薩は衆生一切の苦悩||泥を根として蓮華を咲かせる。

(五) 百字偈「菩薩勝慧者乃至盡生死恒作衆生利而不趣涅槃」

^(六)蓄積が必須であり、その為の布施の行||自分から進んで行う自己を投げ出す決心が必要だ。つまり菩薩道への決心であり即ち菩提心を興すことだ。

それを踏まえた上でこの「一切法清淨句門」という如來大悲の教えを説く。さらにこの教えは深遠であるから正しい発心^(七)をして良く学び修行を積んで理解できるようになつたものだけに限つて説く。即ち十七種類の清淨句が示す心を説く。清淨句を説く理由は究極においては、善と悪や美と醜や貴と賤は決まつたものではない。あるのは苦悩である。だから心を入れ替えればあらゆるものが善に変化する機縁を持つているのだ。

諸経に説く。

◆「三界には心のみがある。^(八)その心が煩惱世界、物質世界、

(六) 一つの智慧ではなく一人一人の一つ一つの苦悩に向き合う智慧だから一切智慧であり、そのいぢいぢに留まらないから一切智慧を知る智慧であるから一切智智。

(七) 信心、勝義心、大悲を完備する発心。三摩耶戒序。「三教指歸」に、「いかんが己身の膏肓を療せずしてたやすく他人の腫脚を發露すや。」

(八) 心以外は存在しない。SN5-10「衆生は認められない。あるのはもろもろの形成集合のみであり苦しみのみがある。」ドゥールーズは「哲学とは内在平面に新しい概念を打ち立てること」と語る。概念とは想。発見と命名と意味付けだ。

参考に、釋摩訶衍論は大乗起信論に「摩訶衍者。總説有二種。云何爲二。一者法。二者義。所言法者。謂衆生心。是心則攝一切世間法出世間法。依於此心顯示摩訶衍義。」とあるのを「摩訶

無形世界の三つの領域をつくり出し変化させる。有情の心が清浄であれば有情は清浄である（涅槃世界）。有情の心が煩惱の状態にあれば有情は煩惱に染まるのである（煩惱世界）。だから有情世界を離れては菩薩の世界はないのである」。

それでは一切法清浄句門を説こう。

★妙適清浄句は菩薩位なり。

☆妙適とは男と女が抱擁して一つになるときの喜びである。これは金剛薩埵の境界である。なぜ抱擁の譬えを用いるかというと、金剛薩埵はあらゆる衆生に対して無条件の愛によって一切衆生の安樂利益を願いつつ、ひとときもその慈愛の心から離れることなく自他平等無二の境地に居続けるのである（自分と他人が苦楽や涅槃に於いては同じであり、故に分かり合うという境地に分かり合っている共感共鳴している境地）。

行者總者。即是所入根本總體門。即是根本摩訶衍中有八差別。」と新解釈。大乘起信論の説は悟りへの船は一心三大。釋摩訶衍論は繪。

(一) 唯一残存釈迦肉声の Sat ⑮ 經に既出「何処（別の世）を探しても安穩な場所はなかった……自分の矢を抜くしかない」。同⑯ 經「この世も別の世も望まない」。

(二) 「Bhup(ブウプ)・テラヤカ・カニヤット」4:321/これこそ、欲望を絶し、諸悪を滅し、恐怖をなくした、その姿である。あたかも愛する人に抱擁せられたる時、人は外に何をも感知せず、内にも感知しないが如く、これこそ、かのプルシャは、知ること自体であるところのアートマンによって抱擁せられて、内にも外にも何物も感知しないのである。それは、まさにカーマ（欲望の対象）を獲得し、カーマがアートマンとなっている、そして求める対象としてのカーマが存在しない(a-kama)、苦悩のない姿である。（理趣經の性的表現と殺害容認をウパニシャッド等との類似性から定位しその仏教的限界と射程から即身成仏を確定する普通寺教学振興会紀要24号）」

(以下は私見)

ここで法を説いている大日如来は釈迦と自体であり既に三毒を解消して涅槃を確立しているから男女抱擁合体が性欲の充足であるわけが無い。

インド哲学の最高境地の一つは男女合体で示される。それは欲情の満足(四)を表しているのではなく、自我の解放(五)を示す。愚鈍な人は自我を煩惱が束縛して罪をつくる。

煩惱とは貪欲・怒り・無知の三毒であると言われてきたがそもそも釈迦が問題としたのは奪う・排除する・驕るの三毒である。人間を最も不幸にするものは人間である。人間の強欲非道、奪う殺すお構いなしの傲慢ほど人間を苦しめたものはないだろう。釈迦が問題にしたの行き過ぎた欲である。少々の欲求や、気分の起伏、知識の深淺などは問題にしていない。特に他人を思いやる欲求は慈悲として肯定される。ところがウパニシャッドの哲人は無欲でアートマンを愛することを説いた。またインドの輪廻思想では善心や善行も昇天の因となり解脱を損なうと考えた。つまり無欲無心だ。そもそもブツダが悩んだのは殺し合いでありシェアⅡ分配し合うことなく奪い合う人々の苦しみである。彼は人々の弱肉強食に「取る、排除する、傲慢」

(三) しかし、もう一つ別の考え方があつた。同じことを何度繰り返しても意味がないという想いが無いだろうか。飽きるという態度。飽きない人は輪廻し、飽きる人は輪廻からの脱出を図る。とはいえより刺激的なより満足できる快樂を求められている過ぎないとすればそれは釈迦の意思に反する。

(四) ある最高大学の教授は、理趣經はセックス欲を肯定した初めての仏教だというがとんでもない浅学である。

(五) カーマが獲得され、カーマが無くなり、カーマがアートマンそのものになるという三つの意味が説かれる。以下注参考。

の三つを見た。^(二) ①奪うこと②敵を排除すること③快樂自我に酔って他人を省みないこと。この奪う殺す酔うが釈迦の説く三毒である。この三毒が身体に染みつき記憶を汚染したのが業であり、三悪欲^(三)が荒れ狂うのが無明である。業は修行と善行によってのみ清められる。行動の欠如した傍観者然の観照は却って苦難を見殺しにする。三毒は内観^(三)と修行で清める。その行いと衝動を清めた者だけが、この清浄句の教えに入ることができる。だから清浄句の清浄とは、欲望が清いという意味ではなく、欲望が清浄になっているということであり清浄な欲望という意味だ。

この抱擁の境地はヤージュニヤバルキアがウパニシャッドに説く「アー^(四)

(一) SNI-4.4にはこのことが明確に書かれる。

(二) 拙論参照。「最古層経の無記無分別を解明しブツダの科学的思考と平等の趣意を解く」普通寺紀要22

(三) 深い反省。自分に在る見えない矢(三悪欲)や悪環境など真の原因を見抜く。

(四) ① apta-kama/カーマが獲得されている。

ここで言うカーマは欲望ではなく欲望の対象であることに注意したい。カーマとは財宝であったり、王権であったり、田畑、奴婢、食物、宮殿など私たちが欲しがるものである。そして最大のカーマとして愛する人を提示する。ここで言うのはセックスの快樂ではなく、最高の目的あるいはその一切を手に行っているということである。

② atma-kama/カーマがアートマンである。彼のカーマはアートマンである。

そしてカーマは対象物ではなくアートマンとなる。「4.3.2」ブルシャは、知るところと自体であるアートマンによって抱擁せられて、内にも外にも何物も感知しない」。外に獲物を探す限り対象の真偽は問われないが、自分を追い求めると事は異なる。嘘の自分が嘘の自分を求めることになりかねない。

③ a-kama/カーマがない状態である。

知るところとだけ残余して外にも内にも求める対象物がなくなつて

プタ・カーマ、ア・カーマ、アートマ・カーマ(カーマ⇨欲望が獲得せられ、欲望が見えなくなり、アートマンが欲望として浮かび上がる)の状態である。凡人はカーマ(欲望とその対象、例えば性欲と異性や達成感)に圧倒されているから安全欲や食欲や性欲や名誉欲や世間体や嫉妬に支配される。それはカーマの奴隷としての生き方である。釈迦はそのカーマを満足^(五)しているからカーマが不在なのだ(そのためにはカーマ「欲望の標的」を煩惱から涅槃と大悲に変更しなければならぬ⇨発菩提心)。カーマが不在とは涅槃そのものである。

いるのである。ヤージュニヤヴァルキアはこれを説いた後、「4.5」妻を愛するがゆえに妻が愛おしいのではない。アートマンを愛するがゆえに妻が愛おしいのである。実にアートマンこそ見られるべきもの、思考されるべきもの、そのときこの世の全ては知られるのである」。後述の大円鏡智や月輪観はアカーマか。

(五) カーマを満足するとは抱擁を成就することではない。本当の愛人を発見すること⇨涅槃と大悲を愛人とする。しかし例えば龍樹は沢山の欲望達成(性欲、所有欲、食欲など)の果てに改心している。戒律遵守の範囲内の欲望達成は良いのか。あるいは欲望達成は全く不可か。大日はヴァイローチャナ varicana であり古いお経に左記とある。

「SNI-1.8 ヴェローローチャナが「一切の生き物はアルタ目的を目指して生まれた。あちらでもこちらでもその分に応じて。そしてその享樂は目的との結合が最高である。」と説くのに対して釈尊を支持する神が「その目的は達成されたならばみごとに輝く、しかし耐え忍ぶこと kṛanti よりも、更に優れたものはない」と説く。つまり大日の前身はこの世の目的成就の神なのである。目的成就といつても人を傷つけること⇨悪業を奨励しているわけではないが、義を優先すれば広範囲の闘争を容認するだろう。ならば密教がわざわざ敵神を登場させるのは何故か。一切皆苦への反撃と読む。般涅槃主義批判だ。もっとおおらかにみんな楽しんで行きようというのだ。その根底は欲望制御と共感共生であることは明白であり当然戒律遵守である。戒律とは他者を損なわないこと⇨清浄である。

では釈迦が涅槃に安住したかというところではない。

釈迦はそもそも発心したときに一切衆生の苦しみを背負っている^(一)。だから世間のあらゆる有情が苦悩する限り涅槃は到来しないのである。それが大悲であり大きな悲しみであり自分以外の人々の悲しみが涅槃を遠ざけるのである。ならばこれもまたカーマかもしれない^(二)。逆に人々の苦悩を見て見ぬふりをしたり知らずに通りすぎる事の方がカーマかもしれない。釈迦はとんでもないカーマを背負いこんだのである。それをアートマカーマと呼んでも良いかもしれない。人格への愛、人格完成を求めるカーマ。いやそれ以上に、人間愛、皆一緒の幸福を求めるカーマである。さて妙適の本丸である他人の幸福を祈って他者と無二平等とはどういうことか。これがこの経の全ての鍵を握る。

『以無縁大悲。遍縁無盡衆生界。願得安樂利益。心曾無休息自他平等無二』カルマと三毒を解消した如来には既に愛欲など存在しない。彼にあるのは大悲のみである。大悲は衆生救済という大欲となる。そこでこの経は大樂金剛不空真実經と名付けられている。その者（如来）が見ているのは性欲の対象ではなく衆生の苦難であることはいままでもない。妙適と吾れ樂しめば汝も共に樂しむ。

- (一) 彼は人を殺す苦しみに立って、他の同様に殺す人びとを共感し、殺される人びとを共感して、人間たちの営みを少水中にのたうち回って他を傷つける魚に譬えて見せる。SUTAS 普通寺紀要21。「性靈集」に、吾れ飢うれば汝もまた飢有。吾れ樂しめば汝も共に樂しむ。
- (二) これは自分のカーマと他人のカーマの妥協なのか、調和なのか、昇華行為なのか、それとも今までにないカーマの創出なのか。
- (三) 自分を標的にした愛欲。

は大悲大貪欲^(四)に居づけることであり、衆生の苦難と向き合っていることである。そして他人の苦難を他人事とはせず自分のことのように思っているから自分と他人が分離せず不二なのだ。この不二は中辺分別論や道元が説く能取所取の分離以前の状況をいうのではない。互いが共感し合って和解しているという現実を説く。それは救援ボランティアなどで被災者と救援者（非被災者）が、①当初は感謝と善意で意気投合しつつも真の回復が達成されなければ、②やがて虚偽や偽善の救援となつて反目するが、③それでも救援に執着して応援し続けているとき再び反目を越えて和解していくときに得られる合意の快感に似ているだろう。この不二は観念や観想や瞑想ではなく現実の確かな肌触りであり他人から得られる頷きであり対話としての和解なのである。互いの性欲の完結^(五)ではなく心と心の行き来である。加持である。だから妙適であり不二平等なのである。

では大欲の人は自分は涅槃という至福に入ったの何故に今また他人の苦難を背負ったのか。自分の問題が解決して次には他人の苦悩を背負って

(四) 三段。欲無戲論性とはこのことを再説。

- (五) ヤージュニヤバルキアは、完璧な男女抱合（カーマとは自分の欲望が創出した幻影であり、ある種の自己分裂である。そうでないとすれば完全に独立した他者による自己疎外であり、そうならば合一とはその自己ならざる他者との和解でなければならぬ。他者が他者であるとは他者が自己と異質であるべきであり、その差異は大きければ大きいほど良い。つまり和解できない他者と和解することが抱合なのである。）において、忘我を説く。自他融合の境地。このとき自分が誰であるとか相手がチャンドーラ被差別民であるとか富貴であるとかの区別はなくなる。父も母も子も孫も師匠も弟子もなく一体であるという。アトマンを愛する同志として平等なのだ。釈迦においては涅槃を求める同志である。それは菩薩であり、完成した者は如来である。

他人の涅槃の道のを行くのか。^(二) そうではない。

この答えは釈迦の肉声^(二)経にある。彼は（家族を守ろうと仕方なく）人を殺そうとした瞬間に殺人者全ての苦悩を背負った。敵に向けた矢が実は自分を射ることだったのだ。ではそれは苦しいことかいうと、彼は見えない矢のカラクリを知ってその矢を抜いて平安を得たのであるから、彼は他人の苦悩を背負いながらも平安なのである。

ある人が苦しんでいる。大悲大欲は彼を救おうとする。その為には彼の苦難を知らなくてはならない。彼の苦に足を突っ込むのである。すると足に泥が着く。これを救済時の垢という。本当の如来なら即座に的確に彼を救うだろう。しかし私達が彼を救うときには①心の救済方法が不明であったり②見返りを求めたり③時には意思の疎通がはかれず対立したり④真の喜びや涅槃が共感できなかつたりする。こんなときに妙適が指摘するのは次のことである。

- ①自分の三毒（取る、排除する、傲慢）は解消されているか。
- ②真に相手の為を思っているか。^(三)
- ③相手と共感ができているか。意思の疎通。痛み^(三)の在り処。真の原因。
- ④相手の涅槃（真の救済）の在り処が理解されているか。
- ⑤涅槃の共感の喜びに満ちているか。みんな違ってみんないいが良い。決して押しつけてはならない。

（一） ダライラマはこのように説くがそうではない。苦悩自体が利他なのだ。

（二） 拙著「武器を手にする経と死後を憂う経の比較により釈尊の原体験を特定する」普通寺紀要21

（三） 同事。ことを同じくする。生活を同じくする。相手の立場に立つ。観音菩薩は相手の姿で救済に来るといふ。泥棒には泥棒の姿で、乞食には乞食、被害者には被害者の姿で。

その原点は釈迦の体験にある。「武器を取る偈」^(四)にあるように、人をあやめようとしたその行為のまっただなかに

- ①相手の痛みを感じる。
- ②次に相手を殺せない自分に苦しむ（更には肉食の苦）。
- ③相手も同様に殺せない苦を担っているのを共感して苦しむ。
- ④その自分の苦しみと共感の苦しみの二つを自分や相手だけでなく全人類全生類が苦しんでいるということを感じる（共感、受苦、共苦）。つまり最終的に釈迦は全生類の苦しみを背負ってしまったのである。その共苦の解決のために彼は出家修行したのだ。

共苦が発心だ。大悲が発心だ。

発心には最初から大悲が不可欠なのである。彼は自分の苦しみを解決するために出家したのではない。一切衆生の苦の解決の為^(五)にである。だからその時すでに釈迦は自他不二^(五)だったのだ。自他不二の苦惱こそ釈迦出家の動機である。この点を見逃しては覚りは永久にやってくる。初発心時便成正覚つまり発心したときに覚りの是非は決まってしまうといわれる所以である。動機は是非と深淺が結果の是非を決定しているのだ。だから情のないものは永久に覚らない。

共感しつづける釈迦が仏教の原点であるとすると、奪う排除する傲慢の三毒の例えば奪うは、相手から奪うが、相手を共感するから奪われた相

（四） Sn4-15 「武器を手にして恐ろしくなった」

（五） ヴァーイローチャナの転向。彼のアルタ^(五)目的は愛欲から菩提心（信心、勝義心、大悲心）に転換した。

■ 欲箭清淨句是菩薩位。

由修慾金剛瑜伽三摩地。得
慾箭清淨句。是故獲得慾金

剛菩薩位

觸清淨句是菩薩位。

愛縛清淨句是菩薩位。一切自在
主清淨句是菩薩位。見清淨句是
菩薩位。適悅清淨句是菩薩位。
愛清淨句是菩薩位。慢清淨句是
菩薩位。莊嚴清淨句是菩薩位。
意滋澤清淨句是菩薩位。光明清
淨句是菩薩位。身樂清淨句是菩
薩位。色清淨句是菩薩位。聲清
淨句是菩薩位。香清淨句是菩薩
位。味清淨句是菩薩位。

手の痛みが即座に自分に跳ね返る。だから相手から奪う
ということは自分から奪うのに等しい。共感する相手を
自分と一心同体と表現するなら、奪うとは自分から奪う
こと、殺すとは自分を殺すこと、慢心とはその痛み人居
続けることに等しい。そうならば、釈迦は全生類と共感
を通じて自他不平等（一心同体）となつた出家時に永
遠に続く菩薩の道に漕ぎだしていたのだ。

釈迦の得た境地は最古経Sn4⑤に「一切所平等平安。
あらゆる場所にあらゆる人と心を通じ合つて心が満ち足
りている」とある。自他不平等⇩一切所平等平安。理
趣釈は最古経へ回帰したのだ。否、最古の肉声は底流に
流れて居たのだ。

だから妙適の清淨という言葉で表される状態は菩薩のあ
るべき姿なのだ。
真に共感する人は皆一緒に幸福にならなければ幸福にな
れない。だから百字偈に独り涅槃に行かないと書く。

■ 以下欲箭など残りの十六の清淨が説かれる。

(一) 原語は *surata-visudhi* である。「①妙適が清淨である(セツ
クスは清い、となる)」と読むか「②清淨が妙適である(清淨が
妙適で示される時と読む)」と読むか「③妙適の清淨(妙適が清
淨であるとき、妙適を清淨が制限する読み方)」と読むか。②か
③の読み方が正しい。我が梵文の恩師である小林先生は、清淨
それが妙適であるときとの読み方を教示された。つまり清淨が
妙適というもので指示されるときという意味だ。私は清淨なる
妙適と読みたい。②③はどちらも妙適と清淨の両語が互いを
限定仕合い高めて居て初見の概念を創出している。

② 欲箭(箭は矢。妙適の求愛の矢^(二))は、涅槃を損なわな
い菩薩の態度。それどころか衆生救済の欲箭は菩薩の真
髓である大悲の欲箭である。欲箭の欲は大欲⇩保身の欲
ではなく自他平等利益の菩薩の欲である。生き物の苦し
みをなくしようと救済の思いが矢の如く走つて他人(相手)
へと大悲が向かう。

③ 触。接触すること。人の痛みに触れる。相手の立場に
立つて共感して相手の経験を体験する。

④ 愛縛(相手との共感の過程)。一心同体となる。あた
かも自分が相手となつてその人が好む標的(カーマ⇩悪
欲が産む幻影)を追いかける。

⑤ 一切自在主(共に共感する絶頂)。いまや相手の立場
で相手の身体内観や環境や家族などのあれこれをあたか
も自分のことのように体感する⇩相手のカーマで飾られ
たカーマ世界^(三)に浸る。

⑥ 見。体感によつて身も心も相手の視点で見ることがで
きる。相手のカーマを巡回。

(二) 釈迦は弓矢の射手として名声を残している。これは後世
の作り話であるだろうが、マガダとコーサラに挟撃されて皆殺
しの運命を辿つたシャカ族の有力者であつた釈迦が名手であつ
たことは確実だ。釈迦は肉声の経(Sn4-15)で見えない矢を抜
くことを説く。矢は通仏教では煩惱の譬喩だ。ここでは大悲に
よつて人の痛みを知ろうとする様子を矢に譬える。矢の如くに人
のことを気にかけるのである。⇩八段、纒發心轉法輪菩薩。

(三) Sn4②経。私達の住む世界はカーマで飾られた洞窟。

何^(一)以故一切法自性清淨^(二)故。般若波羅蜜多清淨^(三)。

…者。雖一切法本來清淨。

由有客塵煩惱習氣。覆蔽身心輪迴六趣。由獲得瑜伽理趣四種智印。所謂大智印。三昧耶智印。法智印。羯磨智印。如前菩薩一一具四種印。相應方得離垢清淨。便證普賢大菩薩。位設使因緣不具不得四智印。如經所說一聞於耳。獲得勝福決定不異。疾證無上正等菩提。以爲正因。

(一) sarvadharmāḥ sva bhāvāvisuddhāh sarvadharmasvabhāvaśūnyatayā prejñāpāramitāviśuddhir bhavati 雖一切法本來清淨。由有客塵煩惱習氣。
(二) 大般若經六百卷の理趣品にはこう書く。「一切法自性空故、自性遠離、由遠離故、自性寂靜、由寂靜故自性清淨、由清淨故甚深般若波羅蜜多最勝清淨。如是般若波羅蜜多當知即是菩薩句。」

⑦適悦。鼠の心、泥棒の心、そのいぢいぢの心でカーマ(愛欲を燃やし愛欲の対象を物色して)を巡らして舌なめずりする。満足した暁の快樂を想像して喜悅する。

⑧愛。(相手の立場で)カーマに縛られて思い焦がれる。

⑨慢。(相手の)カーマが満たされることを想像して満悦に奢り高ぶるを見る。

⑩莊嚴。(相手の立場で)身の回りをカーマで飾って喜悅する。(Sn4-2カーマで飾られた洞窟参照)

⑪意滋澤(他人の賛美を必用としない充足感)。カーマを得て至上の満足に忘我する(apta-kāma-kāma)。

ここまででは觀音菩薩が三十三の化身となって泥棒には泥棒の姿で現れてその欲望を叶える幻想によって仏道に導く様に、未達の凡夫の気持ちとなってその追体験によって幼児(凡夫)とともに初期の欲望を満足していく様を説く。そして幼稚な欲望の満足を経て、分岐点としての光明||真の希望||発心であり仏の幸福が目標となって光り始める。そのとき今まで三悪欲によって曇っていた迷妄世界は真実世界へと転換して色声香味身樂を奏で始めるのだ。

⑫光明(最高の希望)。前項までで満足を果たした。あるいはより高次元の欲求によって下位の煩惱を満足させて欲望が満了したり消えたり昇華してあらゆるものが光り始める。

⑬身樂(最高の身体的満足)。身体は樂し。

⑭色(最高の物質的充足)。色形あるものは美し。

⑮聲(声、最高の言葉の躍動)。聞こえるものは樂し。

声は動作。

⑯香(最高の身引き締まる想い)。雰囲気は樂し。香は存在。

⑰味(最高の取り込み的充足)。何も吸引しなくても生の味わいは樂し。味は快樂。興味。失望と満足。

なぜそのような菩薩行が可能か。

あらゆる存在するものはそれ自体の性格はないのである。一切は無自性であり空だ。善か悪か、好か嫌か、という停滞がないのだ。だから過去の悪業と現在の悪行と未来のカーマから遠ざかれば清淨となる。あらゆる意識できるもの、あるいは無意識が捉えるもの、そして捉えられないもの(未だ遭遇して居ないもの)の本体と相貌と働き(体と相と用)は煩惱によって他人を傷つけること

(一) 空海大師は空とは無自性なり。無自性故に去卑取尊と説く。善悪の行為の成り立つ範囲が广大であり可能性満杯無限。

(二) 七段に三解脱門。体は空であり空とは無自性 niṣvabhāva。相は無相 nirmitatā。用(縁起、作用反作用) || (私の他への働きかけ) || 願は無願 aparinidhāna。無自性とは自分で生じないという意味もある。SN5-9この个体 bimbam は自分の作ったもの atakatan でもなく、他人の作ったもの parakatan でもない。原因によつて生じ Hetum paicca sambhūtan 原因が滅したら滅は hetubhāga nirujhati。相は地柄から凶柄を取り出す特徴である。全体とは部分が無ければ捉えられない。部分は何らかの特徴や範囲限定によって認識される。縁起生においては部分を抽出することは仮説・仮説・譬喩である。願とは縁起生の相に比重を求めること。相の軽重を

☆金剛手。若有聞此清淨出生句般若理趣。乃至菩提道場。一切蓋障及煩惱障法障業障。設廣積集必不墮於地獄等趣。設作重罪銷滅不難。若能受持日日讀誦作意思惟。即於現生證一切法平等金剛三摩地。於一切法皆得自在。受於無量適悅歡喜。以十六大菩薩生。獲得如來及執金剛位。

★時薄伽梵一切如來大乘現證三摩耶一切曼荼羅持金剛勝薩埵。於三界中。調伏無餘。一切義成就。金剛手菩薩摩訶薩。爲欲重顯明此義故。熙怡微笑。左手作金剛慢印。右手擲擲本初大金剛。作勇進勢。說大樂金剛不空三摩耶心吽引

金剛勝薩埵者。金剛義菩提心是也。勝謂最勝。薩埵名勇猛。於三界中調伏者。三界謂欲界色界無色界。於中能調伏摩醯首羅等諸天難調伏者。令得受化無餘。
◆一切義成就者。普賢菩薩異名也。金剛手菩薩摩訶薩者。

とによつて溜まる悪い意識の相続(二)をして地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天人の六通りの幻想的苦の世界を現につくり人々を苦しめている。過去からの悪事の蓄積によつて悪い意識が相続して悪い意識を形作り、悪事を働いて他者を苦しめ自ら苦しむのである。経験が足りなかつたり認識が不十分であつたりして自分や他人を苦しめるから罪悪なのであり、その誤つた選択を回避すればたちどころに清らかなものに変化する。というより清らか(一)(清淨句の清淨の含意)とはその回避そのものである(相談員の熟達者は来訪者の困難を理解する都度に解決策並びに解決した暁の喜びが目には浮かぶ。困難即喜び、煩惱即菩提。解決策が目には浮かぶことがサマヤ受記)。故に回避可能な有能者には善も悪も汚染も清淨も変幻自在である。

清らかとは何度も言う様に苦しみをつくりたくないという意味である。苦しみというが耐えがたい苦しみを言うのであり適度の苦しみは涅槃の範囲内である(三)と考へたい。た決めること。価値の仮設である。

(一) 理趣釈に「習気」。vasanā 苦しみを生み出す身口識三業を行うことによつて、集(集諦の集、苦を生み出す原因)となる、習慣や言葉や悪意への魅力が相続していくこと。第八識アラヤ識。それが清められて大円鏡智と成る。

(二) ある弟子たちは完璧を目指した。つまり完全な無欲である。しかしそれは釈迦の求めたものではなかつたことは最古經に明白。では何故完璧なものを求めなかつたか。その答えは现实生活に在るといえないだろうか。完璧とは何か。もう一つの我欲だと釈迦は言うだろう。完璧を求める心理が次の闘争を生

たとえば他者の痛みを共感する痛みや釈迦が終末に耐えた腹痛しかりである。

だから次の四つを改めれば直ぐに清らかになるのだ。四つとは①釈迦の覺りを逸脱しないこと。②大悲の目的を同じくすること。③教えを守ること。④行いを正しくすること。これらの四つである。

大般若經六百卷の理趣品にはこう書く。

「一切法自性空故、自性遠離、由遠離故、自性寂靜、由寂靜故自性清淨、由清淨故甚深般若波羅蜜多最勝清淨。如是般若波羅蜜多当知即是菩薩句。」

つまり空とはいま私や貴方が思い込んでいるその意味を一度保留にして見直すことだ。あらゆるものは何かをしなくては企んでいたりもしない。それは我が心のいとなみである。作為だ。そのことを知ればすべては何時でも良いものに変えることができる。つまり眞の洞察力である般若(三)という智慧を獲得すればあらゆる存在が涅槃へと移行する。

☆利益分は省略。

★時に、世尊は、一切如来が入れ代わり立ち代わりして全むとは言えないか。いい加減とかほどほどが良い。それは言い草ではなく生活の智慧であり、釈迦が原体験(発心)に思つたことだ。目的は一義利(理趣經二段)。目的は一つである。あらゆる生き物が生きていることを有意義だと思つ事だ。

(三) 般若の柔軟性・可塑性・については十一段。

此菩薩本是普賢。從毘盧遮那佛二手掌。親受五智金剛杵。即與灌頂。名之爲金剛手。菩薩摩訶薩者。如前所釋。

二段

爾時。薄伽梵毘盧遮那如來。復說此一切如來寂靜法性。現等覺(一)出生般若理趣(二)。

所謂金剛平等現等覺。以大菩提金剛堅固故(三)。

……者。由如來淨阿賴耶於大圓鏡智相應(四)。證得堅固無漏

(一) sānta-dharmatā-abhisambodhi-nīhāram

(二) prajñā-paramitā-nayam

(三) vajra-samatābhisambodhau mahā-bhōdhir vajra-dhātayā

(四) 「無畏三藏禪要No.917次應修三摩地。(月輪觀)所言三摩地者。更無別法。直是一切衆生自性清淨心。名爲大圓鏡智。即更觀察漸引令廣。或四尺。如是倍增。乃至滿三千大千世界極令分明。將欲出觀。如是漸略還同本相。

ての生き物を涅槃に運ぶ乗り物(大乘)であり、その道は釈迦によって既に確立されていて(サマヤ)、その道が現に証明される一切如來の曼荼羅において金剛五鈷を手に持つて持金剛勝薩埵と成つて、金剛を手中に収め(↓金剛手)三界にあらゆる衆生を調伏する一切義成就(↓釈迦||金剛手)菩薩となつて再度この目的を明らかにするために左手は金剛五智慧を得た慢心を示し、右手は五鈷を何度も擲擲(ちゆうてき)(放り上げては受け止め)して(放り投げて)衆生の煩惱を砕いては(受け止めて)金剛智慧を披瀝することを繰り返しつつ、自他不平等の心境へと階梯を上つていく勢いを見せて大樂金剛不空三摩耶心を説く。フーン(三)。

二段 大日が一切如來の涅槃(四仏の智)を説く

(一) 義||アルタ。成就||シツディ。シツダアルタ||釈迦。釈は普賢とするが、普賢とは釈迦のいちいちを見習うこと。釈迦のジャータカ||福德を完備すること。釈迦の足跡を辿ること。

(二) 右手で五鈷を放しては握る。放すはカーマ(所得)を捨てる、あるいは煩惱を砕く。握るは智慧を握る、あるいは大悲で相手の苦惱受け止めることを表す。左手はその度にその成果を確認する。

(三) 「うんこうじつこいしよ」と気合を入れて表現する身体が発する自然語、感嘆詞。

次に大日如來は、涅槃への道程(引導、みちすじ)を説く。一切如來が成し遂げて今ありありと現わされている寂靜(涅槃)を湛える覺りを生み出す道程を説く。その一切如來の覺りとは曼荼羅四仏の四智慧(一)(二)(三)(四)を順次獲得していくことだ。

○大円鏡智(だいえんきぎょうち)。『金剛平等現等覺。以大菩提金剛堅固故。』

如來と同じ金剛を持ちうるという平等によつて到達する現等覺の道においては、金剛を堅固に持つことによつて大菩提が成立する。すなわち金剛をしつかり持つことによつて大菩提がある。というのは私達は一切如來の覺りをもたらず金剛と同じ金剛を持つことができるからである。

すなわち金剛によつて阿賴耶識(あらや)(↓ずつと戒律を守らず罪悪を行つて溜めてきてた悪い習慣や記憶と現在の三悪欲や煩惱)を清めて三悪欲や煩惱のなくなった曇りのない大円鏡智をつくるのだ。この果てし無く広がる鏡のような心は一切の苦しみを生み出すことのない堅固なサマーディ↓精神集中(五)によつて得られる。精神集中↓心を悪に向けず金剛に集中すること(月輪觀(六))によつて、

(四) vajra-samatābhisambodhau mahā-bhōdhir vajra-dhātayā。金剛は初段冒頭、破摧、不動、如如で説明。

(五) samādhi↓精神集中。そのことだけに意識集中して他のことを寄せつけない一心不乱な精神性。四無量心の捨。悪の一切を遮断制止。他人の苦惱に専心して他のこと考えない。

(六) 無畏三藏禪要No.917では月輪觀によつて大円鏡智が得

(二) 之三摩地。能淨無始無明地
微細煩惱。

◎^(一) 義平等現等覺。以大菩提一義利
故。

…者。第七無漏末那。與
第八淨阿賴耶識中無漏種子。
能緣所緣平等平等。離能取
所取故。證得平等性智。流
出隨其衆生愛樂身。由如衆
色摩尼。能作無邊有情義利。

◎^(二) 法平等現等覺。以大菩提自性清
淨故。

…者。與妙觀察智相應。證

初觀之時如似於月。遍周之後無復方圓。
作是觀已。…即此自性清淨心。以三
義故。猶如於月。一者自性清淨義。離
貪欲垢故。二者清涼義。離瞋熱惱故。
三者光明義。離愚癡闇故。…如虛空。
亦莫作空解。以無念等故說如虛空非謂
空想。久久能熟。行住坐臥。一切時處。
作意與不作意。任運相應無所罣礙。一
切妄想。貪瞋癡等一切煩惱。不假斷除。
自然不起。性常清淨。」

(一) samadhi 精神集中

(二) eka-artha

意識されることなく蠢く三悪欲等^(一)を清淨にして如如に写
し出すのだ。

月輪觀などサマーディによつて出現するのが大円鏡智で
ある。

大円鏡智とは字の如く大きな鏡のように何でもそのまま
に映し出す心だ。悪欲の消滅した心であり、その心はあ
らゆる事態に遭遇しても、自分本意ではなく他人や世界
をそのままに映し出す。衆生救済においては相手のい
ちの逆境に寄り添いそのままを映しつつ即応した正し
い判断を得るのだ。

その為には金剛を理解せよ。金剛には如如^(二)と不動の意味

られると説くが、そのことが既に第3古層經典スッタニパータ
第5章7經に「何物も前に見ないことで何も存在しないとい
うことを抛り所として、大洪水を渡り(月輪觀Sāṇīに萌芽)、
サンニヤーから解放されて saṅghavimokhe、何処へも行かず静
止する tithēya so tatha anāyayī。彼が清涼なのか、彼には
意識があるのか、それは分からない。彼は名称と身体から解脱
していて、姿が見えなくなり、測ることができない」。但しこれ
は古層順に第1釈迦在世時、第2直弟子時、第3釈迦を知らな
い弟子たち時代の第3古層であり主題は死後の存在であり釈迦
は否定した無記範疇の問題である。

(一) 三悪欲は意思を上まわる強烈な勢いで走り回り意識され
にくいので最古の經Suttas 經では「見えない矢」と表現される。
強烈な食欲や性欲や危険回避欲が起こったときその正体を見極
めたり制御することは困難だ。そうでなければ殺し合いも格差
放置も飢餓の人々への不分配も説明できない。

(二) 梵語は tathāだ。そのものずばりの意味。此処に能取所
取不二平等が生きてくる。

がある。不動とは涅槃に住して揺るぎないという意味で
ある。如如とは大悲の衆生救済の活動において各々の有
情に相応して他者の心を遍歴しつつ如来の境地でありつ
づけるという意味である。一つの如は衆生の苦惱に寄り
添うという意味であり、もう一つの如は如来の如く真実
の救済を逸脱しないと言う意味である。すなわち、自分
と他人といつしよに涅槃を完成できるという信念が鏡の
ような心となつて覚りを完成させる。

◎^(三) 平等性智。『義平等現等覺。以大菩提一義利故。』

如来と同じ義(目的 eka-artha)を持ちうること
(公平等)によつて到達する現等覺の道においては、唯
一同一の義を持つことによつて大菩提が成立する。

唯一大事な目的を持つことによつて大菩提がある。とい
うのは私達は一切如来の覚りをもたらす目的と同じ目的
を持つからである。

アルタ^(四) 義 有意義こそビルシャナの生存意義である。

(三) eka-artha。釈には一切有情の義利。衆生を救い引導する。
それ以外の目的は持たないということ。既にカーマを満足済み。

(四) カーマ、アルタ、ダルマ。カーマは生体的欲求。アルタ
は価値在るもの。地位、名誉、領土、王冠、金メダル。古經の
ヴァーイローチャナ Sūtra はカーマではなくアルタを求め、
その獲得こそが人生究極の喜びだと断じた。しかし釈迦はカー
マとアルタから遠ざかること 忍耐・静止あるいは解放自由を
説く。アルタとはこの世の最高の究極の到達点それは死を意味
もする絶命の地点、その果ての地を意味する。其処に行けばも
はや生きることを強制する何もないのだ。釈迦滅後に弟子の一

得一切法本性清淨。於淨妙佛國土。爲諸菩薩能轉無上法輪。

④一切業平等現等覺。以大菩提一切分別無分別性故。

……者。由如來無漏五識。與成所作智相應。現三業化。於淨妙國土及雜染世界。任運無功用無分別。作佛事有情事。

金剛手。若有聞此四出生法。讀誦受持。設使現行無量重罪。必能超越一切惡趣。乃至。當坐菩提道場。速能剋證無上正覺。時薄伽梵。如是說已。欲重顯明此義故。熙怡微笑。持智拳印說一切法自性平等心惡引重呼

(一) sarva-samatāhīsanbodhau mahā-bhōdhir sarva-avikalpanatayā

菩薩の生きる(この世に生きつづける)目的は唯ひとつである。それは大悲だ。衆生と苦樂を共にする事だ。否、他人の苦惱が自分へと侵入してやまない苦痛だ。自分とか他人とかという区別がなくなるほどに苦しみを共有し共感する。だから自分と他人の境界を越える。喜怒哀樂は民族や国境を越えるというが、それに等しい。共感や

部は般涅槃主義(この世を一切皆苦と見てこの世の一切を否定して、中には衆生救済も停止した主義)に陥るが、再び菩薩道を提唱して涅槃を成し遂げつつ衆生救済を行う大乘運動が再熱する。然しそもそも釈迦は涅槃主義ではなく菩薩道に徹した。

(一) SNMaas4.33 釈迦は修行を完成したゴデーカの自殺を容認する。涅槃↓般涅槃。般涅槃至上思想。

(二) そうであるとする、アルタとはカーマを消化したものであり、カーマとは別の領域の目的である。先に確認したように大悲とは自他不二平等(ある意味で未分離に逆戻り)して他人の痛みを自分のもののように感じてしまう苦痛からの解放だ。水に溺れる子供を見て仕舞ったが故に池に飛び込むしかない。見なければ良かったといえるだろうか。では見ようとしないうことは。見れるのに見ないことは罪悪ではないのか。

(三) サマーディには結合の意味もある。金剛と結合する。あるいは苦しむ人々と結合する。苦を共にする。釈に「認識者と被認識者を離れるならば、あるいは問題解決に集中すれば、その何かと何かが出会う時の自分と他人というものは区別がなくなり平等(↓個々でありながら一つ)となる」。実は弁証法か。縁起でものを考えるということが。現代では量子力学。

(四) ↓妙適。「Bhup(ブ・クハト・フ・ラマヤ・カ・シヤト) 4-4-19/この世には、ひとつひとつのものは一つもないと、意によって知るべきである。この世のものを、一つ一つ別のものがあると見るものは、死から死へと至る。」

共受難は自分を忘れさせ全人類の苦しみを背負うという高い希望を感じさせる。その最高の目的を感じるが故に義平等なのだ。義とは目的。生きる目途である。なぜこれが平等性かという三平等を言う。三は仏と我と衆生である。分かり合うという意味とすべては如来に通じているという意味である。空海曰く「不離衆生界有発身、不離法身有衆生界、諸仏如来昔在因地迷本法身與我無異、然発大精進勤修正行已成正覚。」

これを積は↓金剛平等によって阿頼耶識が清淨(淨分)となり大円鏡智が完成することによって末那識(自我意識)が清淨となり自我がなくなり鏡のように他者を映すことが自分と他者と一体となる(能縁所縁平等平等。離能取所取故)。こうして平等性智を獲得しさらに「流出隨其衆生愛樂身。由如衆色摩尼」つまり、迷える衆生が欲しがらる姿となって、限らない色とりどりの宝を与えて喜ばすのである。

理屈では釈の説となるが、釈迦の足跡を訪ねるとき人々の苦悩を自分のものとして感じたその人間性にこそ源流がある。人の痛みを知る者は自他(自分と他人)の境界を越えるのである。母が子を守るときに自分を忘れるように。また自分に当てはめて他人を思うときに他人を自分と錯覚するようにである。しかしその錯覚は釈迦のように苦難を越えて自己鍛練し経験を積み相手を理解することができてのことである。

◎妙觀察智。『法平等現等覺。以大菩提自性清淨故。』

如来と同じ法（↓存在、捉えられた存在≡概念）を持ちうること（↓平等）によって到達する現等覺の道においては、存在それ自体が清浄であるとの考えを持つことによって大菩提が成立する。

法とは存在であり教えの内容であり、それを見る眼そのものだ。存在と認識は釈迦では一つであり同義だ。存在とは誰と誰がどのようにに出会ったどの様な営みを繰り返すか。認識とはその評価。善悪好悪評価嫉妬である。

法が清浄であるとは、存在やそれを認識した評価である存在把握である概念は善悪を離れて無垢であるということ。つまり親鸞聖人が言う様に悪人は居ないのである。善人も居ない。あるのは無垢な存在である。しかしそうすると菩薩も善人でないということになる。在るのは善悪ではなく涅槃への道だけであるというべきか。中国語の在るは *exist* であり有るは *have* である。善悪は有るが在るのは善悪ではない。在るのは涅槃道である。犯罪者を更生させるのか死刑にするのかの問いだ。釈迦には死刑の選択はない。あらゆる逃亡者をサンガ共同体に匿った。

法↓存在とその把握（心象やその整理と纏めと刻々と変化していく内外の仮想）は無垢である。無垢とは、常に手つかずであり新鮮であり変更可能であり種々の作用反作用で刻々と変化すること。

たとえば向うから見ず知らずの人がやって来る。私は考える。「良い人か悪い人か、挨拶すべきか無視すべきか笑顔であるべきか」。その背後には親密になりたい心と警戒する心が葛藤している。親しくしたいし怖いのだ。菩薩なら差し当たり笑顔で挨拶をするだろう。降三世もあるが。

(一) *dharma*。難解。ひとまとめでできる何かだ。ひとまとめとは、自分、相棒、こども、手、足、頭、思考、記憶、あの時、生きていて良かった瞬間、ひとつのものとしてまとめてとらえることのできるもの。実は縁起生から何かを取り出すことはできないから存在は初めから一味であるのに多様であり部分を持つ。

④ 成所作智。『一切業平等現等覺。以大菩提一切分別無分別性故。』

如来と同じ業（行い）を持ちうること（↓平等）によって到達する現等覺の道においては、一切は分別と無分別を適宜に行うから悪に染まることなく大菩提が成立する。

あるいは妙適が示すように自他分離を克服して自他不二平等の状態を保つこと（≡無分別）に由って自他の皆一緒を実現する。

業とは私達人間が行なう善悪の仕業だ。行いに善悪は無いが他人や自分に苦楽を齎すから善悪だ。業は二つ在る。一つは積分。行ってきた善悪の行為の集積だ。思い、語り、行ったこと、あるいは行わなかった全ての累々たる集積である。もう一つは微分。いま正に行うこと。その集積と現在が一切をつくるというのが古来のインドの思考傾向。ある意味でのその積分からのワープ↓脱出↓即身成仏を企てたのだ。

(一) 梵文は一切 = *sarva*

(二) 一切に無分別と読むのが通説だが（先の注に重複を承知で）第四古層 *SNDaval.3-4* 「*心 mano* をあらゆる事柄から制御するべきではない。自制された心は、抑制すべきではない。悪の生じるその時に応じて、適時心を制御すべきである。1-3-5 真に力ある者は表現として語る。4-2-4 人のために思い哀れむから説法する。順応と反論から解脱しているから。⑤ *SNI.02*。という様に初期の経典に衆生救済のためにする分別の重要性が説かれるのでこの訳とした。もう一つの解釈は、やはり妙適に説くように最高の境地は「以無縁大悲。遍縁無盡衆生界。願得安樂利益。心會無休息自他平等無二」即ち自他の区別を離れて涅槃を大衆することである。だから無分別なのだ。分別とは自他の分離や善悪の分離である。ヤージュニヤバルキアが説くように最高の境地はシュードラも男も女も無いのだ。

(四) 最古経の第二である名色の非私物化では実現を企てて齷齪することを忌避。

(五) *Chandogya* は死後悟を説き、*Yajur*、*Itihasa*、*Myth* は即悟を説く。

▶ 惡引字、心眞言者。具含四字爲一體 a 阿字菩提、心義。

如此字。一切字之爲先。於大乘法中。趣向無上菩提菩提心爲先 a 阿引字者行義。則四智印。瑜伽教中修行速疾方便。由集福德智慧資糧。證成無上菩提正因。第二字極長高聲 an 暗字者等覺義。由證無邊智解脱三摩地陀羅尼門。摧伏四種魔羅。受十方一切如來三界法王灌頂。轉正法輪第四惡字者涅槃義。由斷二種障。謂煩惱所知之障。證得四種圓寂。所謂一者自性清淨涅槃。二者有餘依涅槃。三者無餘依涅槃。四者無住涅槃。前三通異生。第四唯佛獨證不同諸異乘。則此四字是毘盧遮那佛自覺聖智四種智解脱。外現四大轉輪王菩薩。所謂第一金剛薩埵。第二金剛寶菩薩。第三金剛法菩薩。第四金剛羯磨菩薩是也修行者

鍵となる言葉は無分別。この分別という語は既に最古経 Sn 4 ⑮ 経に書かれた。pakappa 後世の vikalpa である。物事に出くわして、その物事を「これは何である」と決定すること。そして決定した好悪のカーマをつくって、次にはそのカーマ（例えば思い焦がれる人や物）の虜（カーマの下僕）となってカーマに振り回されることである。

既に平等性智で見たように、①自我欲の解消と②人の痛みに共感することによって、妙適が示す自他不二平等が達成される。然るに自分と他人を行き来することは矛盾を含む。両者は異質なものである。空海師の境地は「みんな違ってみんないい」である。自分と他人は個性を保ったまま覚る。涅槃は大円鏡智であり一味とも言える。涅槃は完全な充足安寧であるからである。自他が異質であるとする分別しなければ異質なものを共鳴できはるはずが無い。ここに矛盾が有る。しかし初段「與八十俱胝菩薩衆俱」800000000の菩薩と共に居る」▽菩薩も如来も衆生の数だけ有るのだ。そのい・ち・い・ちを分別しつつ無分別なのである。

利益の説明は省略。

▶ 眞言 ah (漢字で悪と表記) に ついて。 ah は a + a + an + ah であり、 a = 菩提(心) (発心) + a = 行 (修行) + an 等覚 (菩提) + ah 涅槃。

涅槃には次の四種類が在る。

① 自性清淨涅槃 || 金剛薩埵 || 発心

② 有余涅槃 || 金剛宝菩薩 || 修行

③ 無余涅槃 || 金剛法菩薩 || 涅槃

④ 無住涅槃 || 金剛羯磨菩薩 || 菩薩行、に配置される。

この 惡 を唱えるのは智拳印の薄伽梵毘盧遮那如来である。ということとは小大如来であり彼は発心 ↓ 成道 ↓ 入滅 ↓ 再臨の過程そのものである。それは釈迦の生涯そのものである。釈迦が発心してから今も説き続けるということはこの如来は示している。

では大・大日とは何か。

釈迦以外の釈迦である。それと釈迦である。釈迦は七番目の仏であり仏は多数である。一切如来ということになると仏は衆生の数だけ在る。心の数だけ在る。イ、ロ、ハ、ニ、ホ、へ、ト・・・あまたの釈迦が居るのだ。その一つ一つが小大日であり(そのい・ち・い・ち・時々刻々の心が小大日)、その集合(大・大日 || マ・ロ・ン・ハ・ヤ・・・)が大大日である。有情のひとりひとりに発心から無住涅槃の道程がありそれが大日だ。そうするとここで言われ

(一) ここは重要だ。だれよりも大きな大日になるのではなくだれとも対等な上中下大中小を越えた人になるのだ。

(二) これはウパニシャッドのブラフマンの思想の影響が大きい。だが自他不二平等故であっても他人に対して冷酷なのは何故だ。インドは差別意識が高く家畜同然に人を扱う。これは宗教の弊害か。しかし誉れ高いギリシャ哲学にしてもその基盤はバルバロイを虐待することだ。フランスで男女平等になったのは第二次世界大戦後だ。進駐軍の憲法というが、女性参政権は彼らによって実現されている。日本の後進性は恐ろしいものが

三段

時調伏難調釋迦牟尼^(一)如來。

……者。毘盧遮那佛轉輪。輪有四種。所謂金剛輪寶輪法輪羯磨輪。其四輪皆攝在二輪中。所謂正法輪教令輪。

即彼毘盧遮那。於閻浮提化成成佛。度諸外道。即於須彌頂示現威猛忿怒形。降伏魔醯首羅等驕伏我慢。妄自恃具一切智。由貪瞋癡一切雜染熏習藏識。爲令彼等清淨。離諸煩惱故。

復說一切法平等最勝出生般若理趣。所謂欲無戲論性^(二)故。瞋無戲論性。癡無戲論性^(三)故。癡無戲論性。癡無戲論性故。一切法無戲論性。一切法無戲論性故。應知般若波羅蜜多無戲論性。

(一) sarva-duṣṭa-vimaya-sākyamunis-tatāgatah

(二) samatā-vijaya-saṅgrahaṇ

(三) rāga-aprapañcatayā dvesa-aprapañcatā/rañj/moha/dvesa 敵意敵對

ていることは釈迦の人生を弟子それぞれがそれぞれの仕方
方で辿れということになる。だから釈迦は臨終に際して
自灯明を説いたのだ。皆が同一の釈迦に成つてはいけな
い。それぞれが自分の釈迦に成る。故に一切智智なのだ。

三段 釈迦が煩惱の退治を説く

三段〜六段は心が順次清浄になっていく過程を説く。

七段〜十段は如来の説法を説く。

三段、大円鏡智、三毒の無戲論性^(一)と般若の無戲論性。

↓七段、文殊の利劍(三解脱門)を振るい諸法が光明に。

四段、妙觀察智、法(存在とその把握)の清浄。

↓八段、如来の転法輪。

五段、平等性智、施行による福德の円満。

↓九段、如来の供養(発心、衆生救済、読誦、修行)。

六段、成所作智、如来の身(三密)具足(完備)。

↓十段、衆生を引導する過程。

十一段、般若の自在性。

十二段、一切有情の成仏の可能性。

十三〜十五段、引入、三宝、四徳。

十六段、般若の大大日への可能性。

十七段、菩薩が発心から三界主に成り衆生救済する道程。

三段は釈迦が三毒の退治と般若の清浄を説く。

① 『欲無戲論性故。瞋無戲論性。』

様々なものを手に入れたいと思ひ焦がれて略奪するこ
と、その欲望を制止し欲望が静止して悪欲が展開しない^(二)
ならば涅槃を損なわない。

諸欲の根源である奪うこと(貪欲とは欲しがること、何
かを自分のものにする事、所得)が停止すれば、欲望
の行使を拒むものを敵視して排除することもなくなる。

② 『瞋無戲論性故。癡無戲論性。』

欲望達成を拒む政敵などの排除がなくなれば、略奪に酔
いしれて傲慢になります。自我を肥大すること(無知
はもともと慢心をもって驕り高ぶり他者を見下して無反
省無関心なこと)もなくなる^(四)。

③ 『癡無戲論性故。一切法無戲論性。』

(一) 梵文 *duṣṭa-vimaya* 強欲非道の人々を導く(釈迦)。まるで
釈迦が戦乱の世に弱小国の一員として生まれ敵に向かったその
殺したくないのに殺す戦いの苦渋の光景を再現する表現だ。

三毒を解消しただけで最高の喜びは来るのだろうか。その喜び
がどれだけのものなのか。平静よりも官能を求める人々に涅槃
は有るか。生きることの意味を見失って過剰な快樂を求める現
代人に。

(二) 戲論の原語は *prapañca* 前へと歩を進める、展開する、
である。

(四) SNI-4.4 には *kodha* 怒り、*māna* 慢心を離れよと説く。
カーマ(他者に執着して思ひ焦がれ所有を念願する)の妄想に
よって他者殺しの罪を犯し *mana* 自我(自分が放したくない物)
に酔い痴れる。

快樂に酔いしれて高慢な心で自己中心的に物事を見るこ

とが無ければあらゆる存在は悪の輪廻（無限反復、無限回帰）をやめて清浄となる。

④『一切法無戲論性故。應知般若波羅蜜多無戲論性。』あらゆる存在またはその把握（認識）が清浄となるとき、それを認識し判断する般若波羅蜜が清浄となる。

しかし貪欲が展開しなければ貪欲が清浄である。「殺意が有っても殺害しなければ良い」とはならない。殺意≠清浄。貪欲≠清浄。他者へと向かう心において、それが我が物にする行き過ぎ↓略奪が貪欲ならば貪欲は非清浄である。貪欲の清浄分は無貪である。

言葉通り説けば無貪↓無瞋恚↓無慢↓一切法清浄↓般若智慧清浄である。わざわざ貪欲の無戲論性を取り出すのは何故か。

そこでもう一度、この段の冒頭を見る。「時調伏難調釋迦牟尼如來。復說一切法平等最勝出生般若理趣。」

釈迦は既に自分は三毒を解消し悪業を含む一切法を認める智慧を持ち、どんな衆生に対しても涅槃への扉を拓くことのできる般若波羅蜜を獲得し終わった。その釈迦が、一切有情（あらゆる存在、特に言うことを聞かない人々）が涅槃へと歩むことのできる道筋（平等な理趣）を説く

（一） sarva-dharma-samata-vijaya-saṅgraham nāma prajñā-pramitā-nirhrām あらゆる存在が平等であるという見方によって人々を調伏することの要約という名の般若波羅蜜。

のだ。

ゆえにここで説かれている貪欲瞋恚慢心は救済する相手の三毒である。釈迦には三毒は既がない。相手の貪欲などが無戲論とはどういうことかというところ、いづれ引導によつて貪欲が無くなるから現時点では問題ないと言っているのだ。その証拠に後の利益分の釈に「爲調伏貪等三毒也」（貪欲などの三毒をなくすことになる）とある。現時点での衆生の三毒は取り敢えず寛容して時間をかけて導くという意味だ。

ならば何もくどくどと言わなくても良いようなものだが、その鍵は「妙適」に在る。「金剛薩埵亦是蘇囉多。以無緣大悲。遍緣無盡衆生界。願得安樂利益。心曾無休息自他平等無二故。」

この自他平等が鍵である。自（自分）は金剛薩埵（釈迦）。他（他者）は一切有情。自分は離三毒。他人は有三毒。離三毒⇨有三毒は成り立たない。離三毒⇨有三毒だ。ついでに「願得安樂利益」も七段「諸法無願與無願相應故者」と矛盾する。釈迦は有願だが諸存在は無願なのか。

ここで思い出すのは空海師の二つの言葉。①「諸法無自性故に去卑取尊」②「諸仏如来とて昔は因地に在つて本法身に迷うことは我と異なること無し」。初段は大毘盧遮那、二段は毘盧遮那、三段は釈迦。

悪人を懲らしめるとするのはその人の三毒を停止させて涅槃に向かわせるためである。悪人そのものに悪の性格があるわけではないのだから、三毒を停止させればおの

☆金剛手。若有聞此理趣。受持讀誦。設害三界一切有情。不墮惡趣。爲調伏故。疾證無上正等菩提。

…者。害三界一切有情。一切有情者。由貪嗔癡爲因。受三界中流轉。若與理趣相應。則滅三界輪迴因。是故

害三界一切有情。不墮惡趣。爲調伏貪等三毒也。故得速證無上菩提。是故如來密意

作如是說。時金剛手大菩薩。欲重顯明此義故。持降三世印。以蓮花面微笑

而怒鬚眉猛視。利牙出現。住降伏立相。説此金剛吽迦囉心吽短

ずと菩提が開くのだ。では、相手を損なうことなくその道に誘うことは出来るのか。また其は私の傲慢な思い上がりではないのか。^(一)

再度訳してみる。

大円鏡智を得た釈迦にとつては、未だ悪業に泥む有情の貪欲(奪うこと)は将来において悪業への活動を静止する性質(静止性||無戲論性)のものである(釈迦の鏡にはそう映っている)。欲が静止を実現するならば瞋恚(敵視と排除)は静止するから瞋恚にも静止性がある。瞋恚が静止すれば慢心(痴)も静止するから慢心にも静止性がある。このように最も悪業であるとされる三毒に静止性があるならば善法のみならず悪法も含む一切の法(あらゆる存在とその把握)も無戲論性(静止性||涅槃へと到る可能体としての性格)がある。このとき一切法を捉える般若波羅蜜も無戲論性を持つ。

この場合、無戲論性(静止性)とは貪欲などの心が相手を害さなければ

(一) みずぎの「みんな違ってみんない」に逸脱するか。

(二) 大乘起信論の真諦と滅諦の二諦論参照。覚る前の心境と覚った後の心境は異なる。三段〜六段は真実諦の説明。

(三) 一切法||善法・悪法・有漏・無漏・有為・無為・心王・心法・心所法・色・染・浄(重複あり。一切法とは善も悪も含むものであり、悪を含む故に「一切法が清浄(無戲論)である」とは言えない。且つ一切法清浄というときには無自性を言う。法は般若や想によつて分別(パカッパ pakkappa/prakappa/vi-kalpa 蜻蛉のようにカーマ||自分の好物として幻想)されて心に描かれて様々に解釈されて怪物となつたり真実相を示したりする。その構造が固定されているものを煩惱という。自由なものであり且つ涅槃に繋がることを明確に見抜くものを般若という。特に般若は常に固定観念に毒されない。

(四) 欲 chanda は全ての心に付随して起る。善と悪と無記の三つの性質があり必ずしも否定されない。貪 raga は心所の一つ。俱舍宗では不定地法、唯識宗では煩惱の心所の一つ。三段の欲は raga で心が染まってカーマから離れなくなる煩

無戲論性であるという意味。しかし此れに続く利益分はどうか。

次に利益分(得益分)。

三界の有情を害しても彼らは(あるいは私は)地獄に墮ちない。なぜなら有情を殺すのではなく三毒を退治するからである。三毒の退治とは菩提を得ることに他ならないからである。

釈迦は性悪の有情を導くために降三世に扮して威嚇して懲らしめる。果ては(三毒を)殺害して輪廻外||涅槃に到らしめる。最古経で釈迦の肉声を伝える SN4.19 経の冒頭は「武器を手にして恐怖が起こった」釈迦の告白がある。そのことを理趣経の作者は知っていて実話の釈迦を描いたのかもしれない。釈迦は人殺しに面して人殺しを苦惱しその上に人々の人殺しの苦惱感じて、その苦惱がなくなるところを探して出家した。二段で示されたように怨念の敵に対しても相手が愛する姿になつて参上し相手を慰撫するのが菩薩ならば、殺害はできない。怨敵の三毒を引導するのみである。

いずれにしても三段が説くのは一切法の無戲論性である。一切法の清浄は一貫して説かれるのであり、一切法清浄であるが、無戲論性において清浄であるのであつて無条件に清浄ではない。本物の般若のみがそれを知る。

惱。chanda は気持ちが向かう。悪にも善にも向かう。

(五) 唯識の一つの唯識無境の解釈としてアラヤ識のみ存在するとするならば、降三世も怨敵も両者とも幻影である。両者ともアラヤ識を出て(唯識を離脱して)五蘊を展開して場外乱闘である。ならば唯識有境だ。

(六) 拙著、普通寺教学振興会紀要24号「理趣経の性的表現と殺害容認をウパニシャツド等との類似性から定位しその仏教的限界と射程から即身成仏を確定する」に詳説。

四段

時薄伽梵。得自性清淨法性如來。復說一切法平等。觀自在智印出生。般若理趣。所謂世間一切欲清淨故。即一切瞋清淨。世間一切垢清淨故。即一切罪清淨。世間一切法清淨故。即一切有情清淨。世間一切智智清淨故。即般若波羅蜜多清淨。

…由瑜伽者得受四種清淨菩薩三摩地。於世間悲願。生於六趣。不被一切煩惱染汚。猶如蓮華。以此三摩地能淨諸雜染。

金剛手。若有聞此理趣。受持讀誦作意思惟。設住諸欲猶如蓮花。不為客塵諸垢所染。疾證無上正等菩提時薄伽梵。觀自在大菩薩。欲重顯明此義故。熙怡微笑。作開敷蓮花勢。觀欲不染。說一切群生種種色心紆喇二合引入

(一) sarva-rāga-visuddhīḥ loke dveṣa-visuddhīḥ(ādat) samvartate/sarva-malā-visuddhīḥ loke pāpa-visuddhīḥ(ādat) samvartate/sarva-dharma-visuddhīḥ loke sarva-satva-visuddhīḥ(ādat) samvartate/

四段 觀自在菩薩が存在の平等（共通項、握手できる通路）を説く

ここでは大日如來は五蘊の濁世に降臨していて觀自在菩薩に変身している。彼が説くのはあらゆるものは同じであるということである。

悲願。生於六趣。不被一切煩惱染汚。猶如蓮華。以此三摩地能淨諸雜染」とある。菩薩が如何にしてこの悪欲と煩惱に塗れた濁世に衆生救済の為に生存し続けて汚れない

(一) 五蘊。この言葉が仏教の主題を射抜いている。自分は存在せず在るのは五蘊のみとか、在るのは苦惱のみとはどういうことか。五蘊盛苦。初めは五蘊⇨見えない矢次に「想⇨色、識、想」⇨色、受、想、行、識。釈迦にとつてはは苦を起す原因であり、弟子の時代にはカーマが起す妄想の意味である。

(二) 平等⇨真理の世界において同じだということ。如来にとつては同じ。衆生にとつては悪は悪である。なぜなら如来は悪事を離れている。衆生は善と悪の違いが分からない。如来は善を知っているから全てに善を見る。凡夫の悪が在ってもその凡夫の苦しみを引き受けて大日如來の立場で物事を見るから如来と凡夫の両方ひいては法界全体の善を見る。カウンセラーは悪人に相談受けたとしても彼を裁くのではなく導く立場で見るから善悪を離れた視点を持つのと共通項が有る。

(三) 互いに殺し合う社会。首を絞め合う日本の社会。其はしかし特権階級が仕組んだ畏ではないのか。江戸時代の五人組が監視社会をつくり三百年を維持した説あり。敵をつくるなとい

いかを説く。

観音とは文字通り「音⇨有情の苦しみの声」を聴く菩薩だ。彼女（彼、非性別）の悲願は衆生救済。故に衆生の甘いも辛いも種々の悪意や悪行や苦悩に直面する。しかし彼女は蓮華の如くに悪事に染まらない。その理由がここに説かれる。簡単に言えば、

- ①彼女の衆生救済の意思は固いから汚れない。
 - ②彼女は涅槃の不動さを感じているから逸脱しない。
 - ③なにより彼女は一切有情の幸福を一義としている。
 - ④一切法の清淨を見抜いているから汚れない。
- 私は最初これらのうちの①②③を有力と思つたが、④が最重要である。

④を言い換えると、「悪人は居ない」ということである。なぜなら一切法清淨⇨あらゆる存在とその把握は悪を離れているからである。

①『世間一切欲清淨故。即一切瞋清淨。』

如来はあらゆるものに対する欲が清められているから、あらゆる人々の怒りを清めることができる。⇨如来は自分の損得ではなく相手の立場に立つて相手の利益を考へるから、有情の怒りに巻き込まれて一喜一憂したり怒ることなく許容することができて相手の怒りをなくすこと

うのが釈迦の遺言である。カーストも特権階級がつくった保身のための偽の宗教。「世界の歴史3古代インドの文明と社会、山崎元二

ができる（↓自分の欲が清浄故に相手の怒り清浄、あるいは自分も相手も両方の欲が清浄故に両方の怒りが清浄。）

如来は大悲のみで相手を見るから相手が怒りで他者を攻撃していたとしてもあなたも母親が愛する子を見るようにどうすれば子が立ち直るかの視点で見る。

③ 『世間一切垢清浄故。即一切罪清浄。』

如来はあらゆるものに対する垢が清められているから、あらゆる人々の罪を清めることができる。↓如来は何に接しても垢に染まること（二）がないから、人々の罪を許すことができる。（又は、全てが遣り直しが効くなら全ては罪を免れる。）

① 一切瞋清浄の立場を得れば相手の三悪欲をどうやって導くか言い換えると「どのような罪をなくす方法があるか」というように可能性の追求となるから、罪を問うのではなく更生あるいは修行の可能性探求へと課題は移る。

③ 『世間一切法清浄故。即一切有情清浄。』

如来はあらゆるものに対して（法や認識が）清められているから、あらゆる人々を清めることができる。↓如来はあらゆる法の見方が正しいので、全ての人を清浄と見ることができる（許容して導くことができる）。悪欲や罪を含めて全てものに涅槃への可能性がある。如来はそう見るからあらゆる存在は許されて清浄だ。凡夫は自分だけ良くあれと思うから全ては善と悪の戦いに巻き込まれる。如来はより良い可能性を見ることができから全存在に善を見る。そのように真実が見えたときそれは「法」と名付けられる。我々凡夫は法は見えないで、

（二） 確かに自分の損得を考えなければ種々の施与が考えられる。守る物があるから与えないで保身する。

識のみが乱舞するから濁世泥中なのだ。

④ 『世間一切智智清浄故。即般若波羅蜜多清浄。』

如来はあらゆるものに対してそのものが獲得するだろう智慧を見る目が清められているから、般若の智慧を発揮して汚れない（二）。

泥中蓮華（三）の譬えの問題点は三点。

一点目は泥中でないと意味がないこと。

二点目は泥中に居て汚れるかどうか。

三点目は蓮花の内容である。

まず蓮華は二種か三種か。菩薩自身（修行者）の涅槃（仏果）と大日の仏果と泥中の仏果の三種が想定される。大日の仏果が一切如来を行き来するとするならば、小・大日の仏果は一種であっても大・大日の仏果は多種無量である。大・大日の仏果が一種であるならば、修行者の仏果も被救済者（泥中者）の仏果も同一であった一種である。しかし一切如来と一切智智というのだから仏果は多々あるということである。だから小・大日ではなく大・大日なのだ。

大・大日の仏果は多種無数であり、その内の一つが修行者の仏果であり、別の一つが被救済者の仏果であり、それらが入り乱れて多々ある。つま

（二） もしも私達が悠久の時間の中で生きているなら、一時の罪に拘泥して恨みを恨みで晴らすよりも「恨みは恨みによつては消えることがない」または「私達は皆死すべきものと思うとき争いは止む」という言葉にハツとして悠久の涅槃を目指すべきだといっている。だからといって戒律を守ることが当然であり罪を認めるわけではない。しかし三段の殺人許容とも取れる利益分は難解である。

（三） 泥とは煩惱。煩惱とは三毒（三悪欲）とそれがもたらす苦。理趣経の主題の妙適は自他不二平等であり、他者の苦悩と状況（苦と縁起あるいは四諦）を理解しないと不二にならない。相手の泥中に足をつっこまないと分からない。苦しみを共感して初めて花を共に咲かせ共鳴できる。

菩薩（修行者）と泥中者の仏果は異なるのであり二種である（このとき大・大日の仏果は度外視している）。そうすると泥中といわれる泥の内容も衆生の数だけあるのであり、泥の数だけ花が咲くということになる。この譬えが不十分なのは、例えば火宅に居て覺りを得るとする。火を消して安穩なのか、火から逃げて安穩なのか、火中に居て安穩なのか不明だ。密教も十善戒や三聚淨戒説くのであり空海は「戒律を守って清涼だ」と断言している。つまり火中に端座して安穩ではなく、戒律を守り綜芸種智院などの仕事を完成して、三毒解消の修行もして仏果が到来する。火中でもなく離火でもないから泥中である。ここで問題なのは菩薩の仏果の安定性である。菩薩の仏果が不動なのか浮動かである。理趣釈の主は不動であると言いつつ切っている。

私はこの問題は既に釈迦の生きざまが泥中不染を貫徹しているから解決済みと断ずる。しかし特に上座部の長老はカルマの反撃を過剰に恐れて、善行もまた輪廻の因として涅槃を損なうと説く。更に泥中に波立つ^(二)心を非難した。理趣經に異常に力説している拘りがある。それは折伏^(三)三段、調伏難調釋迦牟尼^(三)如來である。イスラムに対抗して武力蜂起が要請されたとき仏教は衰退しヒンズー教が台頭した。まさに釈迦族皆殺しの再来である。三段の得益分は読み方によれば「敵の殲滅は人格の殲滅ではなく敵の三毒を解消するためだから殲滅ではない」と読むことも可能だ。まさにオウム真理教の説に酷似する。しかしそうなつてはいけないからこそ瞋恚と罪とあらゆる有情の清淨価値を宣揚するのがこの段である。

(一) Sn4-⑤には「一切所平等平安」。つまり場所が何処でありだれが相手であっても安穩なのが涅槃だとする。この世、別の世を問わない。両方である。要はこの世で頑張れということだ。あの世へ行けばあの世で頑張れということだ。

(二) 上座部は異常に科学を畏れた。科学とは一つの仮説。それを破るのが情だ。

(三) sarva-dusita-vinaya-sākyamunis-tatagarahi

る。つまり「一切有情清淨」。

加えて「世間一切智智清淨故。即般若波羅蜜多清淨」。菩薩の般若の智慧が清淨であるには、あらゆる生き物がおのおの泥中に咲かせる蓮華^{各々}仏果の一つ一つの可能性がしっかりと見える智慧の力が必用だ。どんな悪い子も必ず良い子になるという見通しだ^(四)。みんな違つてみんないいという他者の異種性や異様さを積極的に肯定する智慧の必要性を強調する。

あらゆる存在はそもそも独自の性格を持つていてというよりは視点を變えたり修行を深めることで自由自在に変化するのだから融通無碍でありその意味で平等^(五)である。その観点からすると、世間の奪い合いの根源である貪欲は、それが奪い合いに発展しなければ涅槃を損なわないという清淨の状態にある。すなわち貪欲が静まつていけば奪い合いが無くなり、奪い合いを起因とする怒りや恨みがなくなり、敵対闘争の原因である瞋恚がなくなる。即ち輪廻の因となる悪業がなくなり罪もなくなる。そもそもサムユッタニカーヤSN1-4-4に説くように涅槃を損なうのは制欲できずに自分や他人を苦しめるといふ罪をつくることにあるのだからである。こうしてさまざまな存在が清められていくと有情は清淨になっていく。これらの清淨となった存在を見極めるときあらゆる善の存在が見えてきて一切の良い判断を見る眼（一切智智）が芽生えて、それを保持するとき般若の智慧が確立する。

般若の智慧で見るとき一切はダルマ法となる。

あたかも蓮華が泥中に泥に染まらず清淨な花を咲かせるように、觀自在

(四) 私事乍ら子供食堂学習会を始めたところ勉強せず他の子を悪に導くともない子がやって来た。飴と咎も駄目で排除も考えたが辛抱強くやっていたらその子は良い子だと分かってきた。

(五) 分かり合える道が必ず在る。これについては空海大師は秘藏宝鑰に「空とは無自性なり。故に尊い行為を取り卑しい行為を去らしむ」と説く。

五段

時薄伽梵。一切三界主如來。復說一切如來灌頂智藏般若理趣。所謂以灌頂施故。能得三界法王位。義利施故。得一切意願滿足。以法施故。得圓滿一切法。資生施故。得身口意一切安樂。時虛空藏大菩薩。欲重顯明此義故熙怡微笑。以金剛寶鬘自繫其首。說一切灌頂三麼耶寶心恒覽二合引

■ 四種理趣門。運心遍法界。慈悲愍念貧窮孤露。常行惠施。三輪清淨心無慳吝。常與等虛空三摩地相應。不久獲得虛空藏菩薩身

六段

時薄伽梵。得一切如來智印如來。復說一切如來智印加持般若

菩薩は煩惱に染まつた濁世に臨場しても毒されずあらゆるものの平等性を導き出すのである。平等性とは如来にとつてあらゆるものが否定されるべきものではなくあるべき姿へと変化するものであるということ。再説するが、一切（あらゆるもの）は三毒を免れれば清浄である。そのとき一切は法と成る。識が転変して法となるのだ。清浄は涅槃を損なわないという意味であり、清浄だから即涅槃ということではない。涅槃は初段に説かれるように衆生済度の善行と、智慧獲得の勉強修行の二つの行を完成しないと得られない。三毒消去は必要条件に過ぎない。戒律と同様である。戒律を守らないものは悪人であり、戒律遵守の上に修行が成り立つ。その苦学のはてに涅槃を獲得した大日（釈迦）が説いているのだ。融通無碍の意味は如来にとつては悪を善に変える力があるということ意味で融通無碍であり、修行もしていないものにとつては変化させ得ないから悪は依然として悪である。

例えば、優れたカウンセラーなら悪人の三毒を治して善人に変え得る。下手な細工師は立派な芸術品を台無しにする。心もまた同じであり、心こそ融通無碍であり変化自在なのだ。空海大師は説く。その意味で真言宗は心主義、心偏重主義である。

すなわち、本文の別訳。

三毒のうちの貪欲が清浄となっているものは瞋恚が生じない。瞋恚のないところには加害行為はなく依つて垢はなく罪はない。なぜなら三毒を離れているからあらゆる

存在は清浄である。ということはあるゆる衆生は同等に尊くて清浄なのだ。この三界という苦しみの娑婆世界で生きる衆生のそれぞれが感受する苦悩の一つ一つに訪れる覚りや涅槃の智慧は無量でありその一つ一つを認識できる智慧は清浄であり、その智慧を自由自在に行き来することが般若の智慧であるからそれを得ることは清浄である。すなわち各個体の時々刻々の泥中に咲く蓮華を菩薩と被救済者が咲かせては愛でて讃えるのである。そこで観自在大菩薩は「あらゆる様々な特徴の生き物の特徴ある多種多様の身体と心を説く。フリーヒ（説一切群生種種色心紆喇）」。

五段 宝生如来が灌頂・義・法・資の布施を説く

釈迦大日如来は欲界色界無色界を自由に操る宝生如来となつて、さらにその菩薩の位(一)の虚空藏菩薩となつて説く。

○『以灌頂施故。能得三界法王位。』

虚空藏菩薩は地位や名譽の無い人々に灌頂を施して三界の主の位を授ける。ここでは灌頂という儀式を人々に行なうのであり、儀式を行なうだけで内実が伴うわけではないが、凡夫は灌頂によつて心に王位を得るのだ。

○『義利施故。得一切意願満足。』

次に義を与える。義とは正義であり、正しい心の態度で

(一) 菩薩の位とは悪を善に変えるという工作者の意味。

理趣。所謂

持一切如來身印。即爲一切如來身。

眞言者由得身加持。得無礙

身。於無邊世界作廣大供養。

持一切如來語印。即得一切如來法。

能普護無邊有情界。常以大

慈甲青而自莊嚴。獲得如金

剛不壞法身

持一切如來心印。即證一切如來

三摩地。

得大方便大悲三摩地

持一切如來金剛印。即成就一切

如來身口意業最勝悉地。

金剛手。若有聞此理趣。受持讀誦

作意思惟。得一切自在。一切智智。

一切事業。一切成就。得一切身

口意金剛性。一切悉地。疾證無

上正等菩提。時薄伽梵。爲欲重

顯明此義故。熙怡微笑。持金剛拳。

大三摩耶印。說此一切堅固。金

剛印悉地三摩耶自眞心嚵

七段

時薄伽梵。一切無戲論如來。復

說轉字輪般若理趣。所謂諸法空。

與無自性相應故。諸法無相。與

あり、正しい目的であり、正しい満足方法である。この布施によつて人々は心に満足を得る。菩薩の義は一義で大悲だ。

③『以法施故。得圓滿一切法。』

次に仏法を与える。法は教義であり空、縁起、無自性、

中観、中道、慈悲、戒律などである。人々は仏法を得る。

菩薩の法は一切分別無分別であり一切法清浄。

④『資生施故。得身口意一切安樂。』

次に生きるための生活用品を完備させる。これによつて

身体が充足し考えが明るくなり心は満悦して人々は笑み

を絶やさなくなる。菩薩の生活は質素無為自然である。

菩薩は地位なくところが貧しく不勉強で貧乏な人々を

放つておくことが忍びなくて布施をし続けるのである。

当然三輪清浄であり(①菩薩は物惜しみせず②見返りを

求めず③有益なものを与える)、与える側も受け取る側

も心は清浄となり虚空蔵菩薩の地位を得るのだ。その心

は虚空の如し。まるで何も行き来しなかつたかのように

施与が空気のように往来して真空のように何事も増減も

しなければざわめきもしない。無風の風である。

六段 不空成就が一切如來の身語心業の印を

説く

(一) 菩薩は自他不平等であるからこの世の最も貧しい人と同じ生活をするということになるか。それは釈迦がしていた生活より貧しい可能性がある。

体のしぐさ、言葉の発声、心の持ち方をどのようにすれば、仏の身と言葉と心の完成ができるのか。様々な如來の一つ一つのしぐさの特徵的サインを手にすればその体を手に入れられる。

①『持一切如來身印。即爲一切如來身。』

先ず伝授するところの身印。如來特有の手の形を修行して

身体を得る。すなわち世界の果てまでも際限なく身体

が広がり行き届いて世界を救済する如來の身となる。

②『持一切如來語印。即得一切如來法。』

次に如來の語印によつて仏の教えを得る。

③『持一切如來心印。即證一切如來三摩地。』

次に如來の心印によつて仏の心境を得る。

④『持一切如來金剛印。即成就一切如來身口意業最勝悉地。』

最後に金剛印によつて身口意の業を完成する。

不空成就如來が修行者に仏の身口意を与え魂を吹き込んで

実際に働きあるものとするのである。修行者は一つ一

つの如來の働きを学びそれを習得していく。具体的には

一つ一つの苦の泥中に足を突っ込んで一つ一つの仏果を

得ることである。これは眞言宗の身口意の修行方法に説

(二) 印 mudra. 實際に眞言宗では手や指を使って如來や菩薩や

祈りに一つ一つの形を当てて、その印と同時にマントラ(発声)

と観想(仏の心境)を同期させる。謂わば一切智の一つ一つを

体得する一つの方法である。問題は方法ではなく此れが究極で

あるという考え方である。そうすると印とはそのしぐさで仏の徳

を完備することとなる。しかしそれでは例えば喜び無量心の施

しが實際に成就されないことは明白であるから、衆生救済を殊更に説く密教としてはこの点が難解である。徳一慈悲欠批判。

無相性相應故。諸法無願。與無願性相應故。諸法光明。般若波羅蜜多清淨故。時文殊師利童真。欲重顯明此義故熙怡微笑。以自劍揮斫一切如來已。說此般若波羅蜜多最勝心菴。

☆一切有情無始輪迴。與四種識。積集無量虛妄煩惱。則爲凡夫。在凡夫位名爲識。預聖流至如來地名爲智。以四智菩提。對治四種妄識。妄識既除則成熟法智。若妄執法。則成法執病是故智增菩薩。用四種文殊師利般若波羅蜜劍。斷四種成佛智能取所取障礙。是故文殊師利。現揮斫四佛臂也。般若波羅蜜最勝心者菴字。菴字者覺悟義。覺悟有四種。所謂聲聞覺悟。緣覺覺悟。菩薩覺悟。如來覺悟。覺悟名句雖同。淺深有異。自利利他資糧小大不同。以四種覺悟。總攝一切世間出世間上上。是故文殊師利菩薩得法自在。

く通りでありここでは説けないが、この修行で心のイメージトレーニングをしては悩み相談などの応用実践を繰り返すことで、心身の制御、心の有り様を知ること、あらゆる働きと成果への道筋が見えてくると感じた。特に慈悲喜捨四無量心観と救援活動との往復は意義深い。

七段 文殊菩薩が無戲論を説く

一切無戲論如來(文殊)があらゆるものの無戲論を説く。即ち三解脱門によつて法(諸存在と概念)が光明を放つようになることを説く。三段で三毒の因となる貪欲瞋恚無知の無戲論を説いたが、どの様にすれば三毒が無効となつて停止するかを鍵を教える。

三段から六段は自分を清浄にしていく道である。それは菩薩が如來になつていく階段である。そして七段から十段は清浄になつた如來が菩薩となつて衆生救済する方法が説かれる。

先ず文殊が利劍を振るつて戲言を切り捨てる。利劍は三解脱門である。空と無相と無願である。

○『諸法空。與無自性相應故。』
諸存在は空である。理由は無自性であるから。
○『諸法無相。與無相性相應故。』
諸存在は姿形は本来無い(無相)。私たちの目的(願)

が変化するとき、ものの姿は変化するから。

○『諸法無願。與無願性相應故。』
存在そのものに欲求はない(無願)。修行によつて本能は制御せられ目的や使命は覚醒するし、大悲を獲得すれば自分と他人の優先順位も入れ代わるように、願は変幻自在であるから。

○『諸法光明。般若波羅蜜多清淨故。』
こうして般若の智慧が諸存在のカーマのペールを剥がして清浄となることによつて諸存在は光り輝き始める。

☆『一切有情無始輪迴云々。』上記の意識。

有情は四種の識Ⅱ(前五識(色声香味触)と第六識(思考意識)と第七識(自分を考える識、慢など)と第八アラヤ識)によつて妄想して煩惱を貯め込むから凡夫でありその心は識と名付ける。覚りの行に入ると識を改め智と名付ける。二段に示した大円鏡智などの四智によつて四種の識を退治する。ところがその覚りの法に執着すると人法二空の法空に違反して能取所取の誤りを犯すので大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智に偏つて依存せず見とれず得意にならないように文殊が利劍すなわち般若の智慧で四仏の臂を切り捨てた。というのは智慧の獲得が目的ではなく諸法がそれぞれ光明を放つようになることこそが目的だからである。アム

(一) 別冊石手寺真言修行法、曼荼羅灌頂略次第などに説く。
(二) sarvadharmā nirmītatām upādāya

(三) apranīhīṭāḥ sarvadharmā apranīdhāna yogena
(四) prakṛti-prabhāsvarāḥ

八段

時薄伽梵。一切如來入大輪如來。復説入大輪般若理趣。所謂入金剛平等則入一切如來法輪。入義平等則入大菩薩輪。入一切法平等則入妙法輪。入一切業平等。則入一切事業輪。時纔發心轉法輪大菩薩。欲重顯明此義故。熙怡微笑。轉金剛輪説一切金剛三摩耶心吽

九段

時薄伽梵。一切如來種種供養藏廣大儀式如來。復説一切供養最勝出生般若理趣。所謂發菩提心則爲於諸如來廣大供養。救濟一切衆生則爲於諸如來廣大供養。受持妙典則爲於諸如來廣大供養。於般若波羅蜜多。受持讀誦。白書教他書。思惟修習種種供養。則爲於諸如來廣大供養。時虛空庫大菩薩。欲重顯明此義故。熙怡微笑。説此一切事業。不空三摩耶一切金剛心吽

(一) 頓積集福德智慧二種資糧。

八段 纔發心轉法輪菩薩が教えを展開する

三毒解消すればたちどころに如来の特徴を即座に身につけるといふことがこの法門では平等という言葉で一挙に示される。

空、無相、無願、法光明を得ることによって、その人の心は空っぽでありつつ自由自在であつて如来の特性をそのまま受け取ることが可能である。だからそれぞれの特性と平等になることでそのものを手に入れるのである。

① 『入金剛平等則入一切如来法輪。』

如来の金剛性を引き受けることで即座に法を説くことができる。金剛とは智慧と涅槃と大悲を持つ人格である。

② 『入義平等則入大菩薩輪。』

如来の義（目的と価値規準）を引き受けることであらゆる衆生に正しい目的を与えることができる。

③ 『入一切法平等則入妙法輪。』

如来があらゆるものを平等に見ているように、その平等性を引き受けることであらゆるものごとの生起消滅を正しく見ることが出来る。

④ 『入一切業平等。則入一切事業輪。』

如来が行なう行いを引き受けることで衆生の行為は三業とならず三密となる。三業は苦を広げ輪廻の因となるが三密は人を助け常に虚空の如く余韻を残すことが無い。

(一) samatā

九段 虚空庫菩薩が種々の供養を説く

① 菩提心を起こすことが如来を供養すること（褒めたたえて養うこと）である。

② 一切衆生を救うことが如来の供養である。

③ 仏の諸經典を讀誦理解し続けることが如来の供養だ。

④ 般若の智慧を会得してその智慧でありとあらゆる行為や教えや心境の選択肢を数限りなく見渡して正しくその道を選択して正しい經典を讀解し、他人に広め、また内容を敷衍していくことが如来の供養である。

十段 摧一切魔大菩薩が悪の調伏を説く

悪を懲らしめようとして如来の憤怒が起る。

① 『一切有情平等故、忿怒平等。』

その憤怒は相手に深く共感するから、憤怒は共感である。

② 『一切有情調伏故、忿怒調伏。』

相手を導こうとするから憤怒は引導である。

(二) 釈に濟拔一切有情。滿一切所求希願。令一切有情受諸戒品以自莊嚴。有情に与え満足させ戒を持たせそれが莊嚴となる。衆生の求めることを満足させるとは、如来から見てくだらないこと、ちょっとした草食グルメとか着飾り等も含むと思われる。但し戒律の範囲内の下賤なカーマの充足である。些細な贅沢が含まれるか。初段の宮殿の莊嚴である揺れる旗や寶石群か。

(三) ここで説かれるのは四摂法に等しい。

十段

時薄伽梵。能調持智拳如來。復

說一切調伏智藏般若理趣。所謂

一切有情平等故忿怒平等。一切

有情調伏故。忿怒調伏。一切有

情法性故。忿怒法性。一切有情

金剛性故忿怒金剛性。

何以故。一切有情調伏。則爲菩

提。時摧一切魔大菩薩。欲重顯

明此義故。熙怡微笑。以金剛藥

叉形。持金剛牙。恐怖一切如來

已。說金剛忿怒大笑心郝

十一段

時薄伽梵。一切平等建立如來。

復說一切法三摩耶最勝出生般若

理趣。所謂一切平等性故。波羅

蜜多平等性。一切義利性故。般

若波羅蜜多義利性。一切法性故。

般若波羅蜜多法性。一切事業性

故。般若波羅蜜多事業性。應知。

(一) sarva-dharma-samatā-praśīhitas

tathāgataḥ punar apinam sarva-dharmāgyam

nāma prajñā-pāramitā-nayanam deśāyam āsa

(二) sarva-samatayā prajñā-pāramitā-

③ 『一切有情法性故。忿怒法性。』

相手には必ず涅槃に到るといふ存在の融通無碍性が有るから憤怒の性格は存在のルールを知っている。

④ 『一切有情金剛性故忿怒金剛性。』

相手が可能性として持っている金剛智慧を引き出そうとするから憤怒は金剛を有情と共有する。

即ち、憤怒は平等↓導き↓法↓金剛へと順次上昇してい

く。憤怒は相手の心の成長と友に変化していく。泥中の

衆生に仏との平等性があるから憤怒は平等であり、導か

れるから憤怒は導きであり、導かれて清浄な存在(法)

となるから憤怒は法性であり、最後に衆生は金剛を得て

一切智智を行うから憤怒は金剛性である。

二段で明かされた「発心↓成道↓入滅↓再臨」(四種涅槃①自性清浄涅槃②金剛薩埵③有余涅槃④金剛宝菩薩⑤無余涅槃⑥金剛法菩薩⑦無住涅槃⑧金剛羯磨菩薩)である。憤怒によつて相手を懲らしめるのではなく、先ず相手の平等性(仏の可能性)を認め、次に導き、次に涅槃を得させて、最後には金剛を持つ説法自在者に成るまで伴走するのだ。

◆なぜなら、これは衆生を真の幸福に導くための方便なのであり究極の菩薩道なのである(一切有情調伏。則爲菩提)。即ち相手を正そうとする真の義憤は自分勝手な怒りではなく、相手の心や身体や環境や立場や事情に則して共感を深くすることからはじまる。そして相手の現状を認めた上で次のステップへと導く。その導き方は存在のルールに従うものであり、相手に内在する可能性とし

ての涅槃や金剛を見据えたものである。みんな違つてみんな良いというの相手の尊重と三毒の放棄と涅槃の獲得が入り乱れて幸福へと誘うのである。それでいて当初の衆生の幼稚な目的意識を満足しつつ徐々に段階を上昇して如來の喜びへと昇華させての個性的涅槃なのである。

時に摧一切魔大菩薩は鬼の形相をして金剛の牙を剥いて一切如來を恐怖に陥れた。カッハ。というのは一切如來は個々の優越な覺りを湛えていても三界主である大日如來から見れば自分だけ助かるという偽善なのだ。そこで恫喝して見せたのだ。

十一段 普賢が全存在の真実に到る道を示す

初段で、菩薩のなんたるかを示した。

二段でそれを四仏に展開。

三段〜六段でその四仏(釈迦↓觀音↓宝生↓不空成就)の獲得を示す。

七段〜十段で四仏の活躍(文殊↓纒發心轉法輪↓虚空庫

↓摧一切魔)を示す。

この十一段では般若の智慧が如何に展開するかを明かす。即ち般若が平等↓義利↓法↓事業(四仏)へと変身していくのだ。般若とは prajñā であり、その対極が想

sam-jñā だ。想は中国語の想の如く心に相(姿、色声香味感触の姿)を停滞(滞留)。例えば生住異滅せず駐留し

(二) 剎那滅の四相。剎那滅すれば良いというわけではないが、

時金剛手。入一切如來菩薩三摩耶加持三摩地。說一切不空三摩耶心吽

十二段

時薄伽梵如來。復說一切有情加持般若理趣。所謂一切有情如來藏。以普賢菩薩一切我故。

一切有情不離大圓鏡智性。

是故如來說一切有情如來藏。

以普賢菩薩同一體也。

一切有情金剛藏。以金剛藏灌頂故。

一切有情不離平等性智性。

是故如來。說一切有情金剛藏。金剛藏者即虛空藏也。

以金剛寶獲得灌頂也。

一切有情妙法藏。能轉一切語言故。

一切有情不離妙觀察智性。

是故如來說一切有情妙法藏。

妙法藏者觀自在菩薩也。於

佛大集會能轉法輪也。

一切有情羯磨藏。能作所作性相應故。

一切有情不離成所作智性。能

作八相成道所作三業化。令諸

有情調伏相應也。此四種智。

即四大菩薩現轉輪王是也。

即四大菩薩現轉輪王是也。

つづける) させることであり、渴望である。相(↓対象

そのものではなく自分が思い描いた理想像(カーマ)を

思い焦がれ、欲しがり、嫌がること。それを起因として

奪取や排除の事業が起こる。般若を見る。ただし蓮葉が

水滴をはじくように執着しない。対象にくつつかない。

カーマをつくらない。縁起(↓物事き接触)しても関与

しつづけない。不動でありながら如如でありつづける。

さて先述にあらゆるものは如來と同一であると説いてき

たのだが、その真実はいかにして確立するのか。凡夫に

は悪は悪であり善ではあり得ない。如來にとつては善と

悪は同一とは詭弁ではないか。人殺しもまた善とはなら

ないかと大いに危惧される。その意味はこうである。

普賢菩薩の普賢とはあらゆるものを正しい道に乗せ直す

という意味である。悪が悪のままでは良いのではなく悪は

悪であるが、悪を善に移動させるのである。

その鍵は般若波羅蜜にある。般若波羅蜜とは正しい見方

と正しい判断選択を言う。波羅蜜とは必ずや涅槃の幸福

如何にして不動と如如を繰り返すのか不明だ。水滴が蓮葉にま

とわりつかないという譬喩だけでは不完全。

(一) そもそも縁起なんかない。我と汝があるから出会いがあ

るが、本来自他不二平等であるから、縁起から二つを取り出す

ことはできない。「六大無礙常瑜伽、重重帝網名即身」である。

網の目の一つが自分であり、何処まで自分が分からない。網

の目の一つ一つも六大瑜伽していて変化していく。

(二) 智慧とは決断簡択の義。一切智智とは、智とは決断簡択

の義なり(即身成仏義)。であるならば、一切智智とは一切智の

中から臨機応変に智慧を選び実行する義。

に到ることが出来る智慧という意味である。般若はあら

ゆるものごとを即座にゼロから建て直して良し悪しや成

り立ちや他との関係性や独立性や依存性や発展性などを

洞察していく可塑的で融通無碍な智慧の態度を言う。凡

夫には悪人がどうしようもない人間に見えるが、般若の

智慧ある菩薩には悪人がどのようにして如來に成ってい

くかが見通せるので悪人ではなく如來の子として見える

のだ。訳すと、

①『一切平等性故。波羅蜜多平等性。』

般若波羅蜜はあらゆる人々のあらゆる場合の苦惱苦難の

ひとつひとつを見抜くから平等の力を持っている。

②『一切義利性故。般若波羅蜜多義利性。』

般若波羅蜜はあらゆるもののそれぞれの目的とその成就

を理解するから目的と成就の力を持っている。

③『一切法性故。般若波羅蜜多法性。』

般若波羅蜜はあらゆるもののひとつひとつの在り方と消

滅と関係性と縁起とその特徴を知るから存在を理解する

力を持っている。

④『一切事業性故。般若波羅蜜多事業性。』

般若波羅蜜はあらゆるもののひとつひとつの働きを理解

するから存在を動かす力を持っている。

このようにして金剛を手に収める金剛手菩薩は、一つ一

つの智慧の完成を成し遂げた如來のその道程が保障する

(三) 一切衆生は無上菩提の宝器にあらざることなし「十住心

論」。医王の目には途に触れてみな業なり「般若心経秘鍵」。障

りあるときはすなわち教あり。・・・必ず慈悲による「秘蔵宝鑑」。

時外金剛部。欲重顯明此義故。作歡喜聲。說金剛自在自眞實心。怛囉二合

十三段

爾時七女母天。頂禮佛足。獻鈎召攝入。能殺能成三麼耶眞實心毘欲二合

十四段

爾時末度迦羅天三兄弟等。親禮佛足獻自心眞言娑嚩二合

十五段

爾時四姊妹女天。獻自心眞言哈

十六段

時薄伽梵。無量無邊究竟如來。爲欲加持此教令究竟圓滿故。復說平等金剛出生般若理趣。所謂般若波羅蜜多無量故。一切如來無量。般若波羅蜜多無邊故。一切如來無邊。一切法一性故。般若波羅蜜多一性。一切法究竟故。般若波羅蜜多究竟。金剛手。若有聞此理趣。受持讀誦思惟其義。彼於佛菩薩行皆得究竟

覺りの心境を行き来しつつ必ず涅槃に到る肝心要を説いた。フーン。

十二段 大日如来が有情の可能性を説く

苦悩を生きる有情はみんな般若の正しい道を仏と共有している。次の四点である。

①『一切有情如来藏。以普賢菩薩一切我故。』

有情はみんな如来になる可能性を持つ。その理由はみんな普賢菩薩に成る可能性を持っているからだ。普賢菩薩の意味は有情が各々に如来に到る道筋をしつかりと持っているということである。これは大円鏡智だ。

②『一切有情金剛藏。以金剛藏灌頂故。』

有情はみんな金剛の智慧を発揮する。その理由は金剛を灌頂されるからである。灌頂されるとは「これこれの道を行けばあなたは必ず如来に到る」と保障する権限あるものから自信を植えつけられるからである。金剛の智慧はだれでも獲得できるということだ。灌頂によって智慧が獲得できるとは平等性智である。みずから仏と同等の智慧を獲得できるということは他人もみんな平等にその道筋を持つていて平等に高い価値があるということだ。

③『一切有情妙法藏。能轉一切語言故。』

有情はみんな説法ができる。あらゆる言語に教えが満ちている。これを妙観察智という。正しく知るということが正しい説法である。正しく知ったことを人々に広げるのである。分かったことが無ければ説法は不可能だ。

④『一切有情羯磨藏。能作所作性相應故。』

有情はみんな如来の行動を行なうことができる。自ら行ない作用半作用する世界に生きているからだ。これを成所作智という。

十三段 七母女神が悪を砕く

このとき七母女天は仏足に敬礼してあらゆる悪を捉えて砕き眞実の道に乗せる眞言を説く。ブフヨー。

十四段 三兄弟が三宝を説く

次に三兄弟が仏足を礼拝して仏法僧の三宝を高らかに呼ぶ。スバー。

十五段 四姉妹が四徳を唱える

四姉妹が涅槃の美徳である常楽我淨の四徳を唱える。即ち永遠なること、喜悦なこと、自らつくること、輪廻の汚れを離脱していることを叫ぶ。ハン。

十六段 大日が智慧の融通無碍廣大を説く

この教えが独りよがりのものではなく生きとし生けるものや全存在、全物事に浸透するものであることを示す。金剛の智慧は三毒を離れたものに悉く行き渡って平等で

時薄伽梵毘盧遮那。得一切秘密法性無戲論如來。復說最勝無初中後大樂金剛不空三昧耶金剛法性般若理趣。所謂菩薩摩訶薩大欲最勝成就故。得大樂最勝成就。菩薩摩訶薩大樂最勝成就故。則得一切如來大菩提最勝成就。菩薩摩訶薩得一切如來大菩提最勝成就故。則得一切如來摧大力魔最勝成就。菩薩摩訶薩得一切如來摧大力魔最勝成就故。則得遍三界自在主成就。菩薩摩訶薩得遍三界自在主成就故。則得淨除無餘界一切有情住著流轉。以大精進常處生死。救攝一切利益安樂最勝究竟皆悉成就。何以故

◇(百字偈)

菩薩勝慧者 乃至盡生死
恒作衆生利 而不趣涅槃
般若及方便 智度悉加持
諸法及諸有 一切皆清淨
欲等調世間 令得淨除故
有頂及惡趣 調伏盡諸有
如蓮體本染 不爲垢所染

ある。

○般若波羅蜜は無量であるから、その智慧がありとあらゆる生き物に確立されるときその各々に如来が成立するから如来は無量となる。また時々刻々覚りが変化して無数の刹那に如来が生起するから如来は無量である。

○般若波羅蜜は際限なく染み渡るから如来も無辺だ。

○あらゆる存在は仏の諸特性を次々と發揮するから如来を生むことに於いて共通の性格を必須とする。故に般若波羅蜜は如来へ向い如来を体現するという唯一の重要な性格を有する。

○またあらゆる存在は修行によつて如来へと高められる必然性を持つから究極まで到らなくては意味がない。

しかじかであるから、金剛を手にするものよ。もし人がこのことわりを聞いて、大事にして、読み深く考えその意味を体得するならば、彼は仏と菩薩の修行の道においてひとり残らず涅槃の究極に到る。

十七段 大日如来が無戲論如来となつて最高の大樂が金剛となり実働を伴い必ず到達する道を説く

菩薩が大欲Ⅱ「一切衆生のいちいちの苦しみと共鳴して苦しみを涅槃に変えていくという大悲の生き方」を貫くことで、順次、大樂↓大菩提↓摧大力魔↓遍三界主となつて一切有情の三毒を清めて最高の利益と安樂を叶える。

○大欲↓大樂

菩薩は小さな自我に制限された小欲ではなくあらゆる有情が涅槃に到達して幸福になることを念願するという大欲を起こすことに成功するならば、その大欲が実現されるたびに今までに無い喜びを得るのだ。それが大樂だ。

○大樂↓大菩提

大樂を得たならば彼は次に更に無量の有情を救おうと思ふもつと大きな欲を持つ。そして成就するならば成就している多くの覚りを手に入れる。これは孤独な数々の多種多様を樂しむから一菩提ではなく大菩提だ。

○大菩提↓摧大力魔

種々様々な菩提を得て行くにつれて彼はどんな巨大な三毒を振るうものをも調伏する力量を持つ。

○摧大力魔↓遍三界主

こうして世間の三毒を退治していくならば三界の主となるのである。

○遍三界主↓救攝一切利益安樂最勝究竟皆悉成就

三界の主とはかのビルシヤナである大日如来である。今や彼は自分の涅槃に安住する小大日如来ではなく自分以外の覚りや涅槃を共感し共働し共鳴する大日如来となった。彼の意図するところは、この罪と業が流転輪廻する生死の苦海にどつぷりとつかつて大奮起して努力労働して一切有情を利益し救済し安穩させしめ樂しませ彼ら独自の涅槃を成就する道を伴走をして皆一緒に樂しむことである。

諸欲性亦然 不染利群生^(二)

大欲得清淨 大安樂富饒

三界得自在 能作堅固利

★金剛手。若有聞此本初般若理趣。

日日晨朝或誦或聽。彼獲一切安樂悅意。大樂金剛不空三昧耶究竟悉地。現世獲得一切法自在悅樂。以十六大菩薩生。得於如來執金剛位吽爾時一切如來。及持金剛菩薩摩訶薩等。皆來集會。欲令此法。不空無礙。速成就故。咸共稱讚金剛手言

☆善哉善哉大薩埵 善哉善哉大安樂 善哉善哉摩訶衍 善哉善哉大智慧 善能演說此法教 金剛修多羅加持 持此最勝教王者 一切諸魔不能壞 得佛菩薩最勝位 於諸悉地當不久 一切如來及菩薩 共作如是勝說已 爲令持者速成就 皆大歡喜信受行

大樂金剛不空眞實三麼耶經

その理由は次の如し。

百字の偈

◇至福への力ある菩薩は独り平安に耽溺せず、全ての有情が救われる日を夢見て、人々と苦を共にする。

心に描くことも働きかけも仏陀の智慧を得るなら、行くべき道を正しく選び、欲望を制して、傷害なく苦しみを離れる。一切の苦を除く清浄なる修行を目的とするから、世俗に塗れても戒律を犯えず、自発的に生きる喜びに満ちる。

泥に咲く蓮のように、欲望と罪悪の汚泥に呼吸しながら、それを改変して安樂を咲かせる。

人々を平和にし幸福にする目的に生きる者は、鬭争餓鬼の六道のなかにあつて、ぶつかり合わず、奪い合わず、罪と苦しみを作らず永遠である。

世界平和への意思は大欲であり、大安樂へと到る。その意思力こそ、欲の世界、物の世界、意識の有無を問わず、国境や宗教や差別や、あらゆる障壁をなくし、自在に、一切有情の至福を作る。

★金剛手よ。この般若波羅蜜のことわりを聞いて日々読誦しあるいは唱えあるいは耳にするならば、あらゆる喜びを得る。すなわち大樂を知ることによって金剛の智慧は実際に動き始めて究極の涅槃へと進む。あの世を待つま

でもなくこの世であらゆる存在や事柄を自由に楽しむ境地を得るのだ。そして十六の菩薩の境涯を次々と体験して金剛をしつかりと握る如来の位へと登る。フーン。そのとき、あらゆる如来をはじめ金剛を手にするあまたの菩薩たちは皆わんさと集まってきてこの教えをしつかりと齟齬なく速やかに成就したので金剛手を賛嘆して感動の詩を歌った。

☆善いかな善いかな、大菩薩よ。善いかな善いかな大安樂。善いかな善いかな誰でも乗れる教えの船よ。善いかな善いかな、本物の智慧。この教えを広めるならば、金剛の経文が守ってくれる。この最高の教えを保つものは、あらゆる魔物も破壊できない。仏菩薩の最高の覺りを得て、もろもろの成就を長い時を待たずして完成する。一切の如来と菩薩は共にかくの如く説き終わった。その教えを守るものを速やかに成就させる。そこでみんなが大いに歡喜して信心を起こして修行に入る。

実働して眞実を見せ金剛智慧の大樂を生む釈迦が証した道を説く経此処に畢んぬ。

空海遍照金剛の主著は秘蔵宝鑰（十住心論）であり、有情の心を十種類で説明していて、その根拠は大日経であるがそれだけではない。なぜなら空海さまは既に三教指帰で二つのことを人生の疑問にする。

一つはこの世に沢山の解決できない苦しみがあること。天災や病や老や死や存在の多様性である。もう一つは蛭牙公子を告発する。人為天災であり人間は自分自身の評価である。即ち「性が悪く生き物を狩って苦しめ昼夜酒池肉林に浸り遊興にことかいて博打をする」人々を他人の血を吸って生きる蛭として描く。「下は万民を虐げて人の痛みを知るということがない」と。それは今日の格差を知らながら保身しカジノに走る人々へとあたかも輪廻している。この告発は大日経に出会ってその生き方を異生羝羊心（ただ性欲と食欲を貪る精神）で扱いだす以前のことである。空海さまの卓見はその悪行の由縁の洞察である。この吸血鬼のような血も涙もないような生き物が何故生み出されるかについて「生死まよひの海」で克明に記す。すなわち「波が荒れ狂い雷鳴が轟いて、種々のものが入り乱れてありとあらゆる奇怪な生き物たちが生み出される」と。あたかも地球誕生してより地球スープから生き物が発生するかのような観察がなされる。その描写は印度的ではなく文選などの中国的言辞を駆使しているが空海さまの独自の感性が導き出した現実凝視である。それは理趣経の般若の解明に開花している。そして血吸い蛭公子の悪性の原因は陶然の環境や生い立ちだとするところが既に菩薩道の発想だ。観音の「あらゆる存在とその認識は清らかで如来に通底する（一切法清浄）」と華嚴の「空とは無自性故に去取尊（一切智智）」の発想である。悪人は居ない。何も知らずに生まれて何も知らずに善悪を行って苦しむ人々が如何にして救われるのか。秘蔵宝鑰の冒頭だ。それが生涯を懸けて取り組

まなければならなかった問題なのだ。それは仏教入門4に示した。

幼少から二十歳ごころまでの空海さまがそのようであるから、大日経や理趣経に出会ったときの喜悅はいかばかりかと思うと感涙に伏す。「いつまでも（四国辺土うきくさに）萍うきくさの如く漂うことをやめて……子ことして京へと向かおう。かつて一族再起の登竜門と信じた官位取得すなわち冠や衣の色で上下を付けて他人を食らって生きる出世など捨てて自他平等涅槃の道に行くぞ」という出家の熱意の果実である。その熱意こそ大悲と一切如来加持の原点が在る。

このようであるならば、人を虐げて生きる生き方を改めて〔妙適〕「以無縁大悲。遍縁無盡衆生界。願得安樂利益。心曾無休息自他平等無二」官位の分け隔てなくあらゆる有情に接して安樂利益を求めて対等平等境地を得たいという生き方」を大日経で裏打ちすることはまさに水を得た魚であつたに違いない。

こう書くときまるで空海さまが仏教を利用したような記述であると思われるだろうがお釈迦さまこそが虐げ合いの戦乱で戦士として人を殺せなくて自他一切有情の殺せないし殺さなくては生きていけない苦しみという空海さまと同じ「平等（金剛、義、法、業平等）」の苦しみを負っていたのだから当然の輪廻（受苦、法平等）であり菩薩行（共苦、義平等）であり菩提（解脱、金剛平等）である。「諸仏如来も昔は因地に在って本法身に迷うことは我とと異なること無し、然るに発大精進勤修正行して已に成正覚」、お釈迦さまもかつては私と同じだった。私も進退窮まって辺土するまでは官位を求める蛭と同類のものだった。と推察するのは横着であろうか。しかしこの辺に「仏法遙かにあらず心中にして即ち近し」の五大に皆響き有りがあるように思われて仕方ない。ちなみに空海さまは人間に上下の印を押す官位を蹴ったが同様に釈迦さまは最古の経Sn4⑮で「私は上中下を言わない」と差別を否定している。

現代的意味

一切智智、金剛、如来衆生平等、一切法清浄、無分別成所作智、大悲、妙適、不趣涅槃、これらの術語によって理趣經の主旨は明確になったと思う。

一切智智とは私の理解では大日經に説くように一人一人の衆生の四種涅槃（自性涅槃↓有余涅槃↓無余涅槃↓無住涅槃）を泥中↓成道↓般涅槃↓この世の説法と救済に随伴して成就してそ智慧を獲得すること。つまりあらゆる有情のいちいちの苦悩を知り解決の道を歩み眞の涅槃を獲得しつつこの世で大悲の救済活動を行うことである。その心境は妙適である。

しかしその為には空海様の「いかんが己身の膏肓を療せずしてたやすく他人の腫脚を発露すや。」の如く自分の三毒を解除せねばならない。そして完成するのが金剛でありその徳は不動と如くである。

その手前にあるのが我と衆生と如来の平等である。この平等とは末尾の私見煩惱即菩提で解明のようにあらゆる衆生は釈迦眼で見れば修行すれば必ず菩提にいたるのである。理由は指導者か他ならぬ釈迦だからだ。または空海様がいふ「釈迦も因位には迷うこと私と平等で」である。この釈迦眼で一切を見ると「一切法清浄」である。あらゆる有情は法器にあらざるなしだ。

だから私達も三毒を解消して衆生救済しようよというのである。このとき困るのが金剛の如如と不動の性格だ。有情のいちいちの苦難である泥中に行き来してこれこれしかじかに如如として三毒に振り回されない涅槃の不動を如何に保つかである。そこにそもそも迷いの根源である分別しないということが必用となる。無分別である。この分別はもともと企てるという意味であり、カーマつまり三毒に迷わされて奪つたり排除したり傲慢になったりする悪を妄想したり行動するという意味だ。つまり三毒に振り回されて自分や他人を傷つけないというのが無分別の原意だ。釈迦

滅後長い年月が経つと長老たちは一切の分別を排除して極端な潔癖な無心へ向かったが、それは自分たちの生活を息苦しくし同時に有情救済には泥中に如如として苦悩を共にしなくては不可能なのにそれを困難にした。妙適の解釈は種々考えられるが自他不平等無休であるから共感共鳴は含む。そこで絶対に汚れない智慧が必用となるのであり、それが般若波羅蜜である。理趣經後半では般若の特性が説かれて想ではなく般若であれば特殊潜航艇のように汚れることなく衆生救済が可能だとする。しかしこの問題は釈迦の弟子がずっと気にしていたことであり既に解決済みだったことは本文に示した。だから金剛に不動と如如がしっかりと組み込まれている。以上が大方の理解である。

ところが問題はなぜ大悲が必用なのかである。人間にとつて最も困難なのがこの大悲である。「菩薩の用心は他人を先とし自分を後とす」と言われ欲箭の如く纒な発心で救済せよと言われてもできるものではない。現今コロナウイルスも流行し災害時にはまた弱者から窮状に追い込まれるというのに、いったいどのような菩薩行が可能なのか。と言う前に真に人の痛みを知る大悲が登場するのか。

そもそも大悲を持ち合わせていなければ理趣經全てが無意味だ。私は釈迦様も空海様も戦争や戦いで殲滅される一族に生まれて傷つけ合う泥中のなかで生き方としての大悲を発見し珠玉のように大事にしたのだと確認した（参考書）。それが一義利故である。釈迦様の一義はSṃyāに明確に描かれていて、空海様の一義は三教指帰に克明に記述されていて現存する。どう考えても御二人の動機は哲学的や宗教的な興味ではなく現実の自分の生きにくさであり、自分の泥中を通して他人の泥中へと問題が広がっていくのである。これこそが平等の意味である。時間系列に於ける平等もあれば、横への広がりとしての平等もある。誰もが因位において泥中でありやがて金剛を得るといふ時系列の

平等。これは四種涅槃である。そして自分の苦悩を解決するには人の痛みを知るといふ人間性を蜘蛛の糸として他人の痛みがいつしか自分と同等の痛みへと感じられ、ついには生きるもの全ての痛みの感受性へと横の連帯が敷衍していく。これが我と衆生の平等苦悩であり泥中の意味である。この横の広がりとしての泥中を知るために大師は「菩薩の用心」を説いたに違いない。阿久悠さんが「自分や社会を知りたかつたら人に関われ」と言う。また加藤登紀子さんは「悲しみや苦しみに根ざさない生き方は力が弱い」と言う。なんとなく大悲の縦系列と横系列が見えてきた。縦系列は四種涅槃であり泥中から如何に蓮が咲いて衆生救済するに到るかで後後の十住心論となるだろう。横系列は自分の痛みが独りでは解決できないことに起因しているし、そもそも釈迦や空海様が自分や自分の家族のためだけの解決を求めたのであれば不殺生などの戒律こそ邪魔なものだろう。どこに他人を殺害してのびのびしている人間がいるだろう。だれもが一緒に笑顔を湛えたいだろう。こうして大悲の縦系列と横系列の網羅こそが一切智智の正体である。大悲の重々帝網であり即身成仏である。さて、理趣經の冒頭は一切智智を得た大日如来の降臨から始まる。私は不十分ながらも諸真言や四無量心を毎日行つては、その心の検証として奉仕活動を繰り返して来て微かだが經典読解が深まったと思つている。密教は法身説法である。やつてみて味をしめたから降臨したか。

拙著参考書、仏教入門1&2、仏教入門3、仏教入門4。以下論文、普通寺紀要

武器を手にする経と死後を愛う経の比較により釈尊の原体験を特定する」理趣經の性的表現と殺害容認をウパニシャッド等との類似性から定位しその仏教的限界と射程から即身成仏を確定する」

「最古經のカーマを解明し無常無我空ではなく抜矢と共苦による平安説法を確定する」

「最古層經の無記無分別を解明しブツダの科学的思考と平等の趣意を解く」

私見、煩惱即菩提について

煩惱即菩提は、

①一般には煩惱と悟りである菩提とは相対立するものとしてとらえられるが、両者ともその本体は真如なのであり、真理の立場からすれば、煩惱こそがそのまま菩提にほかならないということ。現実肯定的な大乘仏教の立場を強調した表現。(デジタル大辞泉)

②煩惱の本質はとらわれの心だが真実に照らしてみると一切が実体をもつものではないから恒常性をもつものではなく煩惱も菩提と離れたものではない。(小学館仏教大辞典)

③煩惱がそのまま覚りの縁となること。覚りの現実を妨げる煩惱もその本体は真実不変の真如であるからそれを離れた法はないのでそこに菩提の名を立てて両者の相即をいう。

③は①と②の折衷案か。(東京書籍仏教語大辞典)

①は、煩惱も菩提も同じである。なぜなら $a = 鉄$ 、 $b = 鉄 \rightarrow a = b$ である。煩惱 = 真如、菩提 = 真如 \rightarrow 煩惱 = 真如。

ここで思うのは①一つの有がカーマ = 欲望を起こして多くの個体になったというインド神話である。一つの有 = 真如とするならば多くの多様性は真如の現れであり真如である。もう一つ思いは、②アングリマーラのような悪人も釈迦にとっては弟子であるということ。釈迦にとっては、弟子は釈迦に従って修行すれば菩提に到る。数式にすると

(釈迦) \times (煩惱 = 弟子) \times 修行 \rightarrow 菩提である。

②は、煩惱も菩提も変化する \rightarrow (ならば) 煩惱 + 修行時間 = 菩提、(煩惱 \neq 菩提)

③は、①の理屈だが、修行して煩惱は否定されて菩提になるべし。

もう一つの視点として、真実諦と生滅諦の見方がある。

要は、如来が見ると凡夫(煩惱の体現者)は仏の子(真如同様)であり(真実諦、真如諦)、凡夫が見ると煩惱は退治すべきもの(生滅諦、世俗諦)。

煩惱 \div 真実諦 = 菩提。煩惱 \div 生滅諦 = 煩惱。

煩惱 \div 釈迦眼 = 菩提。煩惱 \div 凡夫眼 = 悪人。

(煩惱即菩提と言いながら理趣経の主張は煩惱の退治であるから、煩惱 + 退治 = 菩提であり煩惱 \neq 菩提である。煩惱 = 菩提 - 修行。)

飛躍するが先日ユゴーの「レミゼラブル」の映画を久々に見た。無宿者を泊めたのに銀の燭台を泥棒されたにもかかわらず司教は「差し上げた」と語る。私なら警察に渡しはしないが燭台は取り戻すだろう。ここで司祭の眼差しは「みんな神の子、悪人は居ない」であるかそれとも「なんとか立ち直っておくれ」か。司祭はジャンが神の子であろうがなかろうが、よしんば異教徒であっても助けただろう。それは優れた人間の人情だと思ふ。悪人 + 時間 + 人情 = 善人である。いやいや、ジャンが将来に善人にならなくても司

祭はそうしただろう。(悪人 + 時間 \neq 菩提, 司祭 = 自己満足)だ。

さて、日本にも同様の話は多々あるが衛門三郎物語。

空海大師が仮に汚い乞食のふりをして衛門三郎に宿を頼むが三郎は追い返す。なのに三郎に不幸が訪れたとき彼は乞食につらく当たったのを後悔する。しかし後悔したのは彼が鬱になって仕事もできなくなり白眼視されて家族に追い出されて乞食に身をやつしてからである。そして三郎は自分の仕業で汚い乞食が辛い思いをしたことを自分の経験を通して痛く感じた。だから生れ変わって人助けしたいと念じて死んでいく。三郎の話は良くできている。

まず、(1)人間には人を助けなければならないと感じる人間性があるということ。但し(2)自分が痛い眼に遇わないと分からない。(3)この話には実は汚い乞食は空海さまであるという隠し球がある。乞食のふりをしていても実は仏である。つまり乞食も仏の子だと暗示している。だから四国の人々は遍路人が裕福なら裕福なりに、また貧相ならば貧相なりにあらゆる人々を弘法大師として扱った。片や哀れみを感じつつ常に手を合わせて尊敬の念で弘法大師さまと唱えた。それとて遍路が過酷な修行の場であったからであろう。

さて、私も還暦を越えていろいろな経験を思い出す。種々の経歴の人々をお泊めして来た。大金が紛失することもあった。野宿してきた人を接待無料で泊めることは簡単なことではない。泥棒に遭っても、その人が困っていればまた泊めるのかどうか悩み込む。泊めただけでは済まない。人を元気にするには食と小遣いを与え仕事を与え褒める。性悪の人と一緒に住むのは自分との戦いだ。空海さま曰く、「道を弘めんと欲わば必ずその人に飯すべし。」と。

人を助けるとはいっしょに沈んでいくこと。そしてなんとかいっしょに浮かび上がること。

さて、煩惱即菩提とはなんだ。汚い乞食が決して訪れない門には、あるいはそういう人を見ないようにしている人には①も可能だろう。②をやってみれば答えは自ずから見えてくる。

ならば、煩惱 \div 慈悲 = 菩提。煩惱 \div 傍観者 = 菩提。傍観者は煩惱の辛さを見ていないから [煩惱 = 空] \div 傍観者 = 0。零は割れない。式として成り立たない。

結局、煩惱即菩提というのは釈迦のみが発することができるといえる言葉だ。大悲のない人には②も③もどれでもいい。空海さま曰く「毒箭を抜かずして空しく来処を問い、道を聞いて動かずんば千里いづくんか見ん。」と。

毒箭を抜かずして空しく仏法を弄ぶを法執という。道を聞いて動かずんば我執強く煩惱という。

師曰く「人心には高下あり、仏道は不高下なり」。

理趣釈対照理趣経意訳

大乗金剛不空真実三摩耶経の理趣釈対照意訳

2020年4月20日発行

著者 加藤俊生

出版者 石手寺サマヤ出版

住所 〒790-0852

愛媛県松山市石手2-9-21 石手寺

☎089-977-0870

ISBN 978-4-909709-13-4 C0015 ¥1000E



9784909709134



1920015010001

理趣釈対照理趣経意訳
大樂金剛不空真実三摩耶経の理趣釈対
照意訳

2020年4月20日発行

著者 加藤俊生

出版者 石手寺サマヤ出版

住所 〒790-0852

愛媛県松山市石手2-9-21 石手寺

☎ 089-977-0870

ISBN 978-4-909709-13-4 C0015

¥1000E